
仮面ライダーダークディケイド 黒き世界の破壊者の旅

ゼロディウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーダークデイクイド 黒き世界の破壊者の旅

【Nコード】

N0012Y

【作者名】

ゼロディアス

【あらすじ】

平凡に暮らしていた男性「風上龍夜」だが、突如その平凡な日々は崩れた。

「世界の融合」と呼ばれる現象によって世界が危機となる。

そして「ライハ」と名乗る女性に渡された龍夜は「仮面ライダーダークデイクイド」に変身し、9つの「仮面ライダー」の世界を旅することとなるのだった……。／原作名増える度更新します。／カードキャプターさくら／タユタマ／魔法少女まどか☆マギカ（この作品はダークデイクイドシリーズのリメイク版です）

第1話 『黒き破壊者』 (前書き)

以前と違う部分がかなりあります。

第1話 『黒き破壊者』

その日……「彼」は夢を見た。

そこは荒野で、「仮面ライダー」と呼ばれる仮面の戦士達が黒い仮面ライダーに大人数で戦いを挑んでいた。

しかし、ライダー達は次々と黒いライダーの放った謎の光線の様なものにやられていく。

『うわあああ！！！？』

「仮面ライダー威吹鬼」「仮面ライダーザビー」「ライオトルーパー」がやられ……。

「ぬあっ！？」

「仮面ライダー龍騎」「仮面ライダーキバ」がやられ……。

「ぐわああ！！！！？」

「仮面ライダークウガ」といった戦士達が次々と倒されて行く。

「彼」と仮面ライダー以外にも……そこには人がいた。

青く長い髪に八重歯を出したドレスの女性が……黒いライダーになるか向かって叫んでいた。

そしてやがて……、黒いライダー以外の……仮面ライダーは「全滅」

した。

黒きライダー……、バーゴードの様な顔に青い瞳がある「仮面ライダーダークデイクイド」は女性に向かって歩き出し、手を差し伸べた。

「……………だけは、守る」

だが女性はその手を弾く。

顔は見えないが、「彼」はその戦士が仮面の下で驚愕したような顔をしている様に思えた。

「なんで僕だけなんだよ!?! なんでこんなことするのさ!?! そんな……………は大嫌いだ!?!」

どうもダークデイクイドと女性が互いをなんと呼んでるのか聞き取れない。

その時だ、倒れていた1人のライダーが立ちあがる。

クワガタのような仮面に赤い装甲……「仮面ライダークウガ・マイティフォーム」である。

「待て……」

ダークデイクイドがクウガの方へと振り返る。

「うおおおお!!!!」

クウガの姿が禍々しいオーラと共に変わって行き、黒いボディに黒い瞳……、クウガ最強の姿、究極の闇「仮面ライダークウガアルティメットフォーム」に変身したのだ。

クウガとディケイドは互いに殴り合いとなるが、少しの差でダークディケイドが上回っていた。

距離を互いにとると、どちらも右拳にエネルギーを溜める。

「やめて!!」

女性が叫ぶが2人の勢いは止まらずディケイドとクウガは同時にパンチを放ち……そして辺り一面が爆発した。

*

「やめろおおおお!!!!」

とあるアパートの一室で、「ぬらりひょんの孫」の夜リクオ似だが、髪が短く、一応言っておくが普通の後ろ頭をしている男性が布団から大量の汗を流して飛び起きた。

「はあ、はあ」と息切れをしており、布団も汗でぐっしりだった。男性の名前は「風上龍夜」かざかみりゅうや、取り合えず起き上がりカーテンを開ける。

「いい天気だな」

外は晴れていた。

「にしても、またあの夢か。まるでディケイドの第1話だな」

ディケイドとは今、彼の世界で放送している平成ライダー10周年記念作品「仮面ライダーディケイド」のことである。

（つうかよ、あの青い髪の女の子、完全にあれだよな。『雷刃の襲撃者』こと『レヴィ・ザ・スラッシャー』だよな、成長した）

「雷刃の襲撃者」とは「リリカルなのは」と呼ばれるアニメのゲーム限定のキャラである。

（そういや、弟はリリなのじゃフェイトが1番好きだったな。俺は雷刃好きだな、フェイトに似てるからじゃなくて……）

そんなことを思いながら、龍夜は外に出て仕事に向かおうとする。

なんの仕事してるかって？

それは秘密だ。

どの道秘密にしくても分かる？

さあ、それはどうだろうか……。

「きゃあああ！！！？」

女性の悲鳴が聞こえ、龍夜が気になり急いで駆けつけるとそこには「ブレイドの世界」の怪人「アンデッド」が人々を襲っていた。

「アンデッド！？　　なんであいつ等が現実の世界にいんだよ！？」

その時だ、龍夜の周りにいた人物もろとも突然現れた灰色のオーロラと呼ばれるものに飲み込まれ、雨の降っている薄暗い場所に出ると「キバの世界」の怪人「ファンガイア」が現れ、人々の生命エネルギー「ライフエナジー」を吸って行く。

「うわあああ！！！？」

「なっ！？」

龍夜はなんとかそれは避けられたが、また別の場所に出てしまう。

「次から次へと……なんなんだよ！」

その時、龍夜の目の前に灰色のオーロラが現れる。

「お次はなんだ？」

冷や汗を流す龍夜。

そしてその中から、夢に出てきた女性……つまり、雷刃が出てきた。

「龍夜ああああ!!」

雷刃は龍夜に飛びかかる様に抱きつき、龍夜はその際背中から倒れこんでしまう。

そして倒れた時、後ろ頭を打ってしまいそのまま彼は気を失ってしまった。

「がはあ!?!」

「龍夜? どうしたの!?! 龍夜!?! 龍夜!?!」

涙目の雷刃は龍夜に馬乗りの状態で彼の肩を揺さぶる。

「あつ、こういう時はアレだね! 人工呼吸!」

なにか言い出したよこの子は。

雷刃は自分の唇に龍夜の唇をくっつけると自分の息を龍夜の口の中に吐きだす。

「んっ／／／／むあっ／／／／」

人工呼吸でなにを変な声を出しているのだろう。

そしてそれが成功したのか、龍夜は目を覚まし飛び起きた。

「なななな／／／／／／／／／／／／／／／／」
「人工呼吸だけど?」

可愛らしく小首を傾げる雷刃。

「つうか、お前雷刃の襲撃者じゃ……」

「今の僕の名前は違うよ、今の名前は『ライハ』って言うんだ。
未来の君に頼まれてきた未来の君の妻だよ？ まだ結婚してないけど」

目を点にして哑然としている龍夜、だがライハと名乗る彼女は顔を間近に寄せて龍夜にあることを質問。

「バックルとカードは？ まだ見つけてないの？」

「えっ？ な、なに！？」

ライハは辺りを見回すと、すぐそこにダークデイケイドが腰に装着していたベルト「ダークデイケイドライバー」が置かれているのを発見。

ライハはすぐにそれを回収し、龍夜に渡そうとするが、突然彼女の前に「カブトの世界」の怪人「ワーム」が脱皮した状態で4体現れた。

「わあ！？ もう邪魔！！」

ワームはライハに襲いかかろうとするが、ライハはダークデイケイドライバーを龍夜に投げ渡した。

「僕でもこいつ等の相手は流石に難しい、だから龍夜が変身して！」

龍夜は立ち上がり、ライハに向けて頷く。

「なんかよく分かんねえけど……」

龍夜は腰にダークディケイドライバーを装着、その際左腰にカードホルダー「ダークライドブッカード」が出現し、そこからカードを1枚取り出す。

「やれって言うなら……やってやるぜ、変身!!」

ドライバーの中央にカードを装填し、バックル部を閉じる。

『カメンライド・ダークディケイド!』

夢の中で見た存在、「仮面ライダーダークディケイド」に変身を完了させた龍夜。

ダークディケイドはライハに襲いかかろうとしているワーム達をダークライドブッカードを剣型のソードモードに組み換え、ワーム達を斬りつける。

『ギシャア!!?』

ワームはダークディケイドに対し、超高速移動する「クロックアップ」を発動。

対するダークディケイドもカードを1枚取り出し、カードをドライバーに装填。

『カメンライド・ダークカブト!』

黒い装甲にカブトの様な仮面、「Dダークカブトライダーフォーム」

に変身し、さらにカードを装填する。

『アタックライド・クロックアップ』

Dダークカブトもクロックアップを使い、ダークライドブツカーソードモードでワームの攻撃を全て受け流し、自分が繰り出すダークライドブツカーによる斬撃は次々ワーム達に直撃して行き、ワーム達は爆発を起こして全滅した。

『クロックオーバー』

カードが飛び出し、カードに描かれた絵を見ると、その絵は消滅してしまった。

「やっぱりな……」

だが休ませてくれる筈も無く、次は「アギトの世界」の怪人「アンノウン」が3体ダークディケイドの前に現れる。

「人に力など必要ない」

「どうだかな」

ダークディケイドは新たなカードをドライバーに装填する。

『カメンライド・アギト!』

龍のような金色の戦士「Dアギトグランドフォーム」に変身すると、Dアギトはアンノウン達の攻撃をかわしてパンチやキックを叩きこむ。

さらにもう1枚カードをドライバーに装填。

『ファイナルアタックライド・アアアギト!』

頭の角のクロスホーンが2本から6本となり、アンノウン1体に飛び蹴り、必殺技「ライダーキック」を叩きこみ、蹴り飛ばされたアンノウンは他のアンノウンを巻き込んで爆発した。

『うわあああ!!!!?』

取り合えず、怪人達は一通り片付けたので一旦変身を解除する龍夜。

「やっぱりカッコイイ、龍夜!!」

サムズアップするライハ。

「あのなあ」

すると今度は突然辺りが暗くなり、龍夜とライハの前に、1人の青年「紅^{くれないわたる}渡」が現れる。

「紅渡か」

「僕の事を御存じなんですか?」

龍夜は「一応な」と答える。

「なんだ? 俺に9つの世界でも巡ってか?」

「話が早くて助かります。9つの世界に、主人公ライダーとドライバーがそれぞれ9人ずつ生まれました。ですがそれは独立した物語。でもそれらの世界は互い呼び寄せ合って融合を開始

し始めました。それを止めるには……」

「9つの世界を巡ること……」とのことである。

「なんで俺なんだ？ 候補他にいねかったのか？」

「ダークディケイドライバーはあなたに強く反応しています、そしてこれも」

渡が取り出したのは、変わった形をした黒いアイテム。

「これは『ブラックスパークレンス』、闇の力ですがあなたなら、使いこなせるでしょう。それで、行ってくれますか？」

「別に構わない、でも……。弟が気がかりなんだ」

龍夜には弟がいる、たった1人の弟が。

「安心してください、彼の安全は保証します。そしてこの世界も、あなたが世界を廻ってる内はなんとか僕と、その仲間が崩壊を食い止めておきます」

「俺にしか、出来ないことなんだな？」

渡は頷く。

「分かった、お前は？」

龍夜はライハを見て尋ねる。

「僕も行くに決まってるじゃん、その為についてきたんだから♪」
「では、別世界に行くための家も用意しておきます」

渡はブラックスパークレンスを龍夜に投げ渡す。

「そう言えば、これなんだ？」

「いずれそれが必要になる日がくると思います、その時になれば分かりますよ……」

辺り一面が輝くと、渡はいなくなっており、そこは「ディケイド」に登場した「光写真館」そっくりの部屋に龍夜とライハはいた。

目の前には背景ロールがある。

「これで行くのか……」

「じゃあ早く行こうよ！」

ライハが背景ロールの鎖に手をかけると新しい絵が降りてくる。

その絵にはあのクウガの戦士の絵が……描かれていた。

＊

次回予告

小狼

「変わった!？」

黒寺ユウシくろでら

「俺は黒寺ユウシ、よろしく！」

龍夜

「クウガとブラッククウガの世界……」

さくら

「もう、なんでそういう事するのかな2人とも!?!」

次回 『さくらと超古代の戦士』

全てを破壊し、全てを繋げ!

第1話 『黒き破壊者』 (後書き)

龍夜の世界で現在デイクイドは響鬼編終了まで放送しています。
士達が回った9つ以外の世界を龍夜は旅します。

第2話 『さくらと超古代の戦士』 (前書き)

OP 「仮面ライダークウガ」

ED 「青空になる」

バベルはD C D版だと思って下さい。

C Cさくらなんですけど、魔法が無い平行世界だと思ってくれば幸いです。

ホントは原作終了にしようと思ったんですけどね……。

第2話 『さくらと超古代の戦士』

クウガの……正確には「クウガとブラッククウガの世界」に辿り着いた龍夜とライハ早速外に出ると突然服装が警察官の格好へ変わる。

「見てみて龍夜、女性警官♪」

ターンして龍夜に今の自分の格好を見せるライハ。

「どう？ 可愛い？」

「えっ、ああ、可愛いよ」

「可愛い」と言われて満面の笑みを浮かべるライハ。

そんなライハの笑顔に少し見惚れてしまう龍夜。

「龍夜もカッコイイ！」

「えっ？ ああ、有難う」

苦笑いしながらもライハにお礼を言った後、兎に角近くの警察署に行ってみることにした。

歩きながら、龍夜はフツとある事をライハに尋ねてみる。

「そう言えば、お前未来から来たならこの先の展開知ってるんじゃないの？」

だがライハは首を横に振った。

「僕は未来の龍夜になにも聞かされてないからね、これからの事。だから分からないんだ」

「所で……さっ」

「んっ？」

「何時までそうしてるつもり？」

今、ライハは龍夜の腕に自分の腕を絡めており、正直恥ずかしかった。

「いいじゃん、僕達どーせ未来で結ばれるんだし♪」

ため息をつきながらも、案外悪くないと思う龍夜だった。

＊

とある山奥で……あるベルトの形をした遺跡が発見され、そこではこの世界の怪人「未確認生命体グロンギ」が暴れた痕跡があり、警察や学者が色々と現場を調べていた。

そして木に隠れ、その様子を伺う2人の青年。

「なあ、確かにさくらと藤隆さんに会いに来たが、なんでこんなこそこそする必要があるんだ？」

それは茶髪の青年「李^{りしや}小^お狼^{らん}」と黒い髪の青年「黒^{くろ}寺^{でら}ユウシ」といった2人の青年であり、遺跡などの研究などを行ってる「木^き之^の元^{もと}藤^{ふじ}隆^{たか}」

とその娘で、今日は父の手伝いをしに来た小狼の恋人「木之元さくら」に会いに来たのだ。

「いいじゃねえか、小狼なんて久しぶりにさくらちゃんに会うんだからさ」

「だがな、色々手続きが……」

小狼は香港出身であり、さくらとは中々会えない……、そして今日、久しぶりに帰って来たのでユウシの所に行き、さくらのいる場所を聞くと此処だと聞き、連れて来て貰い今に至る。

「それにお前、遺跡とか興味あったろうが」

「そうなんだが……」

「ああ、もう!!」

ユウシは小狼の腕を掴み、無理やり遺跡の元まで連れて行った。

＊

遺跡の建物の中、そこでは先程言った藤隆と茶髪で緑の瞳をした女性木之元さくらがおり、遺跡の調査をしていた。

「お父さん、これ……」

さくらがなにかを見つけ、藤隆に話しかける。

「なにか見つけました？」

「うん」

さくらが頷き、藤隆にもう1つのベルトの遺跡を見せる。

「まだあったのか……」

興味深そうに見る藤隆。

その時だ……。

「ちよい失礼」

「おっじゃましまーす♪」

龍夜とライハが入ってきた。

実は警察署に行くと、彼等の任務は遺跡の回収らしく、その為2人はここに來たのだ。

「あなた達は？」

「調査……風上龍夜、今回このベルトを回収するように言われてきました」

龍夜がそう説明し、「ベルトは？」と藤隆に尋ねると藤隆は2本のベルトを見せる。

（アークルが2つ……？　　というか、この世界でライダーはまだ生まれて無いのか？）

渡が言っていた事に少し間違いが合ったらしい。

主人公ライダーとダークライダー、合計18人のライダーは生まれていないのだ。

（でもこれから生まれるって事だよな、どの道どうにかしないといけないのは一緒か）

ライハはベルトを興味深そうに見ており、龍夜は藤隆と話し、ベルトを回収。

「んっ？　なんか外が騒がしい様な……」

ライハが外が騒がしい事に気づき、外に出るとそこでは……。

「だからね、中にいる人にちょっと用があるんだって！」

「だからといって困りますす！！」

何名かの警察官に見つかったユウシと小狼、そしてユウシが警察の1人と言いつ争っていた。

小狼は「やれやれ」といった顔で見ていると、さくら達が遺跡から出てきたのに気付く。

「小狼くん！？」

「あっ、さくら！」

さくらが小狼に駆け寄り、再会を喜んでおり、ユウシは「よきかなよきかな」と微笑んでその光景を見ていた。

ただ、ユウシはさくらにこっ酷く怒られていたが……。

「なんで俺だけ……」

「小狼くん連れて来たの黒寺くんでしょ!？」

小狼もなんとかさくらに落ち付かせようとする。

「そうガミガミするな、可愛い顔が台無しだぞ？」

小狼のその言葉に顔を赤くするさくら。

「仲がいいね、お2人さん。式は何時？」

「黒寺／くん!!!／／／／」

耳までゆでだこ状態の小狼とさくら。

兎に角、龍夜達は藤隆を連れて警察署に向かおうとしたのだが……。

蜘蛛の様な姿をした「グロンギ」怪人の内の1体、「ズ・グムン・バ」がいきなり現れた。

注意・グロンギのグロンギ語は、日本語表記ですが、一応グロンギ語を喋っています。

「クウガのベルト……、それを渡せ……」

グムンの登場で周りが混乱するが龍夜とライハだけは冷静だった。

「断る……と言ったら？」

ダークデイケイドライバーを持っているせいか、龍夜もグロンギ語でグムンに話しかけた。

「貴様、言葉が分かるのか。ならば話は早い、死にたくなければ早くそれを寄せ」

「だから断る」

龍夜がグロンギと会話しているのに気付く小狼と藤隆は、驚きの表情をしていた。

「グロンギと話してる！？ 学者でもグロンギの言葉を解明した者はいないのに！？」

ライハにベルトの入ったケースを投げ渡し、龍夜はダークデイケイドライバーを腰に装着する。

「アンタ等さっさと逃げろ、ライハは警察署にそれを届けてくれ」

「おK、任せされた！」

小狼が「お前はどうするんだ！？」と聞くと、龍夜は「こうする」と答え、カードを取りだし装填。

「変身！！」

『カメンライド・ダークデイケイド！』

カードをドライバーに装填し「仮面ライダーダークデイケイド」に変身、その事にライハ以外の人達は驚きの表情を見せる。

グムンは口から糸をダークデイケイドに吐きだすが、素早くダークデイケイドはダークライドブッカードをガンモードに組みかえて弾丸

で糸を撃ち落とす。

そのままダークライドブッカーの銃撃を受けるグムン。

「グガア!? おのれ、邪魔をするな……」

「そういう訳にはいかないんだよ」

ダークデイケイドはグムンに向かって走り出し、ダークライドブッカーをソードモードにしてグムンに振りかざすがグムンはダークデイケイドの真上を飛び越えて背後に周り、鋭い爪でダークデイケイドの装甲を攻撃する。

「ぐわあ!?!」

さらにダークデイケイドに連続でパンチを叩きこむグムン、ダークデイケイドはなんとかグムンとの距離をとり、ダークライドブッカーを通常の形態に戻して肉弾戦でグムンに挑むことにするダークデイケイド。

「おりゃあ!?!」

飛び蹴りをまずグムンに喰らわせ、グムンは蹴り飛ばされるがその際を糸をダークデイケイドに吐きだすが、ダークデイケイドは身体をよじらせてなんとか避ける。

「どんどん行くぜ?」

肉弾戦にしてから徐々にダークデイケイドが有利な立ち位置になっていき、こっそり戦いの様子を伺っていた小狼、ユウシ、さくら。

「よし、いいぞ。一気に倒しちゃえ！」

ダークデイケイドが必殺技を発動する為の「ファイナルアタックライドカード」を取り出し、ドライバーに装填。

『ファイナルアタックライド・ダダダダークデイケイド！』

ダークデイケイドの前に10の3Dゲートが現れ、ダークライドブツカーソードモードを構えてゲートを駆け抜け、ダークライドブツカーの刃がどんどん巨大になっていきそれを敵に振りかざす必殺技「ダークディメンションスラッシュ」をグムンに放つのだが……。

「「えっ!?!」」

「なんでそこで!?!」

なんと、ダークデイケイドは寸前の所で動きを止めており、グムンにトドメを刺さなかったのだ。

「ぐう……」

(前は頭が混乱してて訳分かんなかったから仕方なかったかもしれないけど、やっぱ、気持ちいいもんじゃねえな……。怪人と言えど倒すのは)

グムンはチャンスと思い、ダークデイケイドを殴りつけ、さらに鋭い爪で切裂く。

「うわあ!?!」

「なにしてんだあいつ! 折角のチャンスを!?!」

イノシシの様な怪人「ゴ・バベル・ダ」が槍を持って突然現れダー

クディケイドを背中から斬りつける。

「ぐわあ!?!」

「龍夜!?!」

ライハがケースを置いてなにかを取りだそうとするが、それより先にユウシが動き、ケースにあるベルトの内の1つを取り出す。

「黒寺くんなにを!?!」

藤隆がユウシに言う。

「呼んでたんです、このベルトが……俺を。俺に力をくれるって。ずっと思ってた、あんな奴等の為に、これ以上……誰かを死なせたくは無い!?!」

小狼が「やめろ!?!」と叫ぶが、ユウシはベルトを腰に装着し、腰に激痛が走る。

「ぐわああ!?!?!」

痛みに耐え、腰に両手を上げると黒いベルト「ブラッディアークル」が出現し、ポーズを取る。

「変身!?!」

そう叫ぶとユウシの姿が変わって行き、クワガタの様なマスク、「仮面ライダークウガアメイジングマイティ」に酷似しているが、角も色も金色の部分も全て黒く染まった「仮面ライダーブラッククウガ」にユウシは変身した。

「変わった……」

小狼が呟き、ブラッククウガはバベルとグムンに走って行く。

バベルの槍に突かれ吹き飛ぶダークデイケイド、さらにグムンの糸での攻撃を喰らってしまう。

「うわあ!？」

だがそこで、ブラッククウガの繰り出したパンチがグムンに炸裂。

「なにしてんだ! 早くこいつ等倒すぞ!!」

「……やっぱり、俺には……無理だったのかもな」

辛そうに喋るダークデイケイドのその言葉はブラッククウガは聞き取れなかったが、戦う意思が無いのだと判断。

「やる気が無いならそこで見てろ!!」

ブラッククウガはジャンプして膝蹴りをバベルに炸裂させると背後に回っているグムンに蹴りを入れる。

「うぐっ!？」

バベルが槍を振りかざしたが、ブラッククウガは槍を受け止め奪い取り、その槍を黒い棒型の武器「ブラッディロッド」に変換し、ブラッディロッドでグムンとバベルを叩きつける。

「「ぐお!？」」

バベルが勢いよくブラッククウガに殴りかかるが、ブラッククウガはバベルの攻撃を避け、ブラッディロッドをバベルの腹部に叩きこみ、そこに文字らしきものが浮かび、バベルの腰にあるバックル部にヒビが入って爆発した。

「ぐがああああ!!?」

グムンはマズイと感じ、口から糸を吐きだし、木に絡ませて素早くそこから去っていく。

ブラッククウガはダークデイケイドに振り返る。

そこで、ブラッククウガはある事を思い出した。

数週間前、「鳴滝」と名乗る中年の男性にユウシはこう言われた。

「何時か君の前に悪魔が現れる、そいつは世界を破壊するもの……。君に力が宿った時、破壊者を倒すのだ」

ブラッククウガはそれがこのダークデイケイドではないかと考える。

「お前、もしかしてダークデイケイドか？」

「? そうだけど……」

すると急にブラッククウガはダークデイケイドを殴りつけた。

「ぐは!?! なにすんだよ!?!」

「聞いていた通りだな、悪魔!! 何時か現れると聞いていた、総てのライダーを倒す為に!」

「やっぱそうなる訳ね……！」

ライハや小狼達がブラッククウガにやめるよう叫ぶが、今の彼の耳には届かなかった。

次々炸裂するブラッククウガの攻撃を避けるが、足を引っ掛けられてダークディケイドは倒れこみ、その倒れこんだダークディケイドのブラッディロッドを振り下ろした……。

＊

次回予告

ダークディケイド

「ボス直々のお出ましか……」

小狼

「俺も戦う、これ以上……誰かの涙は見たくないから……！」

ユウシ

「見ていてくれ……」

龍夜・小狼・ユウシ

「「俺達の、変身……！」」

次回『変身』

全てを破壊し、全てを繋げ！

第2話 『さくらと超古代の戦士』 (後書き)

やはり光の兄でした。

今回はさくら風で次回はクウガ風タイトル。

第3話 『変身』 (前書き)

ガミオの設定、性格を色々変えています。

小狼結構キャラ崩壊してる感じ……、まあ、平行世界だし。

第3話 『変身』

ダークデイケイドにブラッディロッドを振り下ろしたブラッククウガだが、ダークデイケイドは寸前でガンモードにしたダークライドブッカードでブラッククウガを撃った。

「ぐわあ!？」

「やめろ、俺はお前とは争う気は無い!!」
「黙れ!!」

するとブラッディロッドは形を変え、剣型の「ブラッディソード」となり、ブラッディソードを振るうが、ダークデイケイドはカードをドライバーに装填。

「言ってダメなら分かせてやる！」
『アタックライド・ブラスト!』

複数の弾丸「ダークデイケイドブラスト」がブラッククウガに直撃。

「ぬうわああ!!?」

吹き飛ばされるブラッククウガだが、ブラッディソードをボウガンの様な「ブラッディボウガン」に変換し、ダークデイケイドを撃ち合う。

「黒寺、やめろ！」
「あなたも!!」

小狼とさくらが間に入って止めに入り、ブラッククウガとダークデ

イケイドは動きを止める。

「小狼、邪魔すんな！ そいつは世界とライダーを破壊する！」

「ライダーというのはよく分からないが……、グロンギを殺すのも戸惑った奴がこの世界を破壊するとも？」

ブラッククウガは「それは……」と呟いて変身を解除した。

「自作自演ってことじゃないのか？」

「ふざけんなッ！！」

ユウシの言葉に、怒鳴ったのはライハ……。

「龍夜がそんなことする訳ない！！ 龍夜は破壊者なんかじゃない！！」

ダークディケイドは変身を解き、龍夜はライハの肩にポンツと手を置く。

「いい、こうなることは分かってる」

ライハは龍夜の顔を除きこむと、龍夜の顔はどこか悲しげな表情をしており、ライハの持っているベルトのケースをさくらに投げ渡す。

「ほえ？」

「それはアンタが運んでくれ、悪いけど」

「い、いえ」

龍夜はライハの手を引いてそこから歩き去っていく。

「黒寺……」

「黒寺くん……」

ジト目でユウシを見るさくらと小狼。

「えっ？ なに？ 俺が悪いの！？」

その後、ユウシは小狼とさくらに説教を喰らったとか。

＊

その後、警察署にベルトの入ったケースが届けられ、ユウシは病院に行くように小狼とさくら、藤隆からも勧められたが……。

「いや、俺今日ちょっと用事で無理だ、だからまた今度なッ！」

「今度って、自分の身体だろ……」

小狼がそう言った時、ユウシはもう何処かに行っていた。

だが、数時間後、ベルトを狙い警察署にグムンが乗り込んで来たのだ。

「クウガのベルト……」

グムンはベルトを狙うが、その場にさくらと小狼もあり、小狼はベルトを見ると、頭の中に赤い戦士が戦う姿が映る。

「これは……!」

「小狼くん、どうしたの!?! 早く逃げよ!?!」

小狼はベルトをグムンが近づく前に、ベルトを取る。

だがそれに気付いたグムンは小狼を殴り飛ばす。

「ぐわあ!?!」

「小狼くん!?!」

小狼はグムンを睨みつけた後、ベルト……「アークル」を腰に装着。

グムンは少々動揺していたが、素早く小狼の首を掴んで警察署から出る。

「フン!」

「がは!?!」

小狼を投げ飛ばし、グムンは倒れこんだ小狼に爪を突き刺そうとするが、小狼はグムンを殴ると白い腕に変化する。

「変わった!」

そのままグムンにキックやパンチを浴びせる度に身体が変化して行き、白いブラッククウガと酷似した戦士「仮面ライダークウガ・グロージングフォーム」に変身したのだ。

「やあ!!」

クウガはグムンへと殴りかかるがグムンは避けてクウガを蹴り飛ばす。

「ぬあ!?!」

「はん」

グムンは鼻で笑った後、勝利したと思い、立ち去ろうとするが……。

「うおおおお!!!!」

クウガの押したトラックにグムンは激突し、そのまま壁に激突。

「はあ、はあ……」

だがグムンはトラックを押し返し、クウガはトラックから離れる。

クウガとグムンは掴み合いになり、殴り合いとなるが、クウガの方が若干力負けしていた。

「うわああ!?!」

殴り飛ばされるクウガだが、ゆっくりと立ち上がり、右足が炎に包まれる。

「はああああ……うおりゃあああ!!!!」

「ぬおおお!!!!」

クウガは飛び上がり、飛び蹴り……必殺キック「グロウングキック」をゴムンに炸裂させ、ゴムンは蹴り飛ばされ、そのままどこに行ったのか分からなくなってしまった。

クウガは警察署からゴムンと戦ってる内に離れてしまい、さくらが駆けつける。

「小狼くん……？」

「さくら、あいつはもう、退治したから」

さくらにサムズアップするクウガだった。

その後、変身を解いた小狼はさくらに言われて病院に行くように言われたが……。

「いや、病院より詳しくそんな奴に聞いた方がいい」
「ほえ？」

＊

夕方、龍夜達の家ユウシが訪ねて来たのだ。

「よく分かったな、ここが」

「知り合いの刑事さんに教えて貰ってね」

龍夜はユウシを上がらせるが、ユウシを見たライハはユウシを睨みつけていた。

「おいおい、そんな睨むなって……、てかお前等、同居してんの？」

ユウシの質問に「ああ、まあ」と答える龍夜。

「羨ましい！ あんな可愛い子と一緒になんて！」

「それで、何の用？」

相変わらずユウシを睨みながらユウシに尋ねるライハ。

「だから睨むなって、今回はその……ごめん、いきなり襲って」

「んっ？ ああ、気にしてねえよ」

「よく考えたらあのおっさんの言ってることも胡散臭かったよ。」

それに、青髪ちゃんが本気で怒ってたし」

椅子に座り、しばらく黙りこむユウシ。

そこで龍夜が口を開いた。

「そういえば、お前は どうしてブラッククウガになろうとしたんだ？」

「ブラッククウガ？ ああ、あの変身した奴。 よくよく考えたらお前等何者なんだ？」

首を傾げて尋ねるユウシに、龍夜とライハ、包み隠さず自分達のことを話した。

「信じて貰おうとは思わ……」「成程、そうだったのか」はい？」

なんと、ユウシは普通に素直に信じてしまったのだ。

「大変なんだな、お前等も」

「い、いや……まあ……」

この時龍夜は思った、「信じて貰えるのは有り難いがこいつはバカなのでは？」と……。

とそこでだ、チャイムが鳴り、出るところには小狼とさくらがいた。

「お前等、丁度良かったよ、ユウシも来てるぞ」

「「えっ？」」

小狼とさくらを上がらせてクウガについて話す事にした。

まず、クウガもブラッククウガも、怒りに任せて戦うと『凄まじき戦士』と呼ばれる究極の闇の姿になり、戦うだけの生物兵器となること。

次にクウガとブラッククウガになった者はグロンギと同一の身体になっってしまうということ。

それを聞いた時は、ショックを受けた3人だが……。

「それでも、あんな奴等の為に誰かが悲しむのなら……俺は戦う、笑顔を守るために」

「カッキー台詞言うじゃねえか、小狼。俺も同じ、誰も死なせた

くないから戦う、人の幸せの為に」

小狼とユウシの決意の言葉を聞いて、龍夜はどこか安心した表情を見せる。

だが、さくらだけは不安な表情をしていた。

「大丈夫ださくら、俺はグロンギなんかじゃない、人間として、クウガとしてみんなを守りたいだけだから」

さくらの頭を撫でる小狼。

「うん……、小狼くん、頑張ってるね？」

「ああ」

その後、クウガは「戦士として心構えが不十分だった為、本来の力を発揮することが出来ない」と龍夜から説明された。

だがこれは、オリジナルのクウガである「五代雄介」の推測であり、それも説明した。

その後、3人は帰る事になったのだが……。

「ごめんね」

ライハはユウシにそれだけ言うと、ユウシは「いいって気にしないから！」と答え、小狼達と帰った。

それから、龍夜は風呂に入って疲れをとっていたのだが……。

「龍夜？ どう湯加減？」

「んっ？ ああ、丁度いいよ」

「えへへ、こうしてると夫婦みたいだね♪」

ライハの発言に顔を真っ赤にしてしまう龍夜。

「ねえ、龍夜……僕も入っていいかな？」

「えっ？ いい……訳ねえだろ！／＼／＼」

しかし、龍夜の返事はお構いなしにバスタオル1枚のライハが入ってきた。

「おおお、おま！／＼／＼」

「背中流したげるー♪」

笑顔のライハに、龍夜はなにを言っても聞かないだろうな……と思いつつ、背中を洗って貰うことに。

「どう？ 気持ちいい？／＼／＼」

「う、うん……／＼／＼／＼」

少し龍夜の台詞にムツとしたのか、ライハが龍夜に背中から抱きつく。

「えい♪」

「なっ！？ お、おい！？／＼／＼／＼あ、当たってる、当たってる！／＼／＼／＼」

背中にライハの大きな「アレ」が龍夜の背中に当たっており、必死に鼻血が出そうな自分の鼻を摘まんでいる龍夜だった。

(あいつ等は、ああやって戦う理由がある……、俺は、何のために戦う?)

*

その夜のこと。

「2人のクウガが復活し、この世界にはあつてはならぬ者が現れたか……」

狼の様な外見を持つグロンギの王の1人、「ン・ガミオ・ゼタ」が夜空に向かって呟いた。

「完全復活してないと言えど、この身体でも十分戦える……。邪魔になる奴は早急に倒さねば」

1時間後、ガミオが複数のグロンギを引き連れ暴れまくっていた。

本来、グロンギは「ゲゲル」とゲーム以外で人を襲うとゲゲルの参加資格を無くすが、グロンギの王「ン・ダグバ・ゼバ」と並ぶ者であり、元々ガミオはゲゲルなどに興味が無く、右手から黒いガスを

放って近くににいる人間をグロンギにしてしまう。

完全のガミオならば、身体から発する黒いガスによりグロンギになるが、今は不完全な為、こうやって人間をグロンギにするしかないのだ。

警察もグロンギ達と応戦していた。

今、「警察」という役割を与えられている龍夜にも応戦の要請があった訳だが……。

「話を聞くからにガミオか、ライハはここにいろ」

「えっ？　僕も行くよ！」

「ダメだ、今回の敵は危険すぎる。だからここにいろ！！」

怒鳴る様に言う龍夜に、ライハは黙りこみ、龍夜は黒いバイク「マシンダークデイケイダー」に乗って現場に向かった。

＊

現場には既にブラッククウガと赤い姿の「仮面ライダークウガ・マイティフォーム」が戦っていたが、ガミオは2人のクウガを圧倒的な力の差を見せつけていた。

「はあああ!!」

ガミオは両手からエネルギー弾を放ち、クウガとブラッククウガを吹き飛ばした。

「「うわあああ!!!?!」」

「2人のクウガ、今此处で始末してくれる」

だがその時、ダークディケイダーに乗ったダークディケイドが駆けつけた。

「小狼、ユウシ! 大丈夫か!?!」

ダークディケイドがクウガとブラッククウガに駆け寄る。

「ああ」

「来てくれると思ったぜ」

だが、グロンギにされた人々がクウガ、ブラッククウガ、ダークディケイドに一齐に襲い掛かる。

「こいつ等、グロンギにされた人間か!?!」

「そうだ! あんな奴のせいで……!!」

クウガは仮面の下からガミオを睨みつける。

『アタックライド・ブラスト!』

グロンギにされた人間はその時点で死んでしまっている、ダークディケイドは仮面の下で唇を噛み締めながら……ダークディケイドブ

ラストをグロンギ達に放った。

(許してくれ……！)

そう思っていたのはクウガとブラッククウガも同じで、グロンギ達と戦っていた。

ガミオはエネルギー砲を両手から放ってクウガ、ブラッククウガ、ダークディケイドは吹き飛ばす。

「「「うわああああ！！！！？」」」

その衝撃で3人の変身が解け、3人は倒れこむ。

龍夜はボロボロの状態でも立ち上がり、小狼とユウシも立ち上がる。

「貴様ら如き、完全では無い俺でも倒せる。無駄なあがきだな」

見下す様に言うガミオ。

「お前だけは……絶対許さねえ！！俺は戦う！！こいつ等が人の笑顔を守る為に戦うなら、俺は……命を奪うお前等怪人を倒す為に戦う！悲劇を……繰り返さないために！！同時に……お前等を殺したっていう罪を背負って生きて行く！！」

最初に龍夜が言い放ち、次に小狼とユウシがガミオを睨みつける。

「俺は……俺達は誰かの涙を見たく無い」

「お前等が人の笑顔を奪うなら戦う……」

ガミオは……。

「黙れ、人間はどの道グロンギとなる運命。それが人間の定めだ
!!!」

しかし、龍夜は「それは違う」と言い放つ。

「そんな運命、こいつ等が変えて見せるさ。 人の笑顔を守ってく
れる、こいつ等がさ」

「貴様、一体何者だ？」

龍夜は小狼とユウシに「行くぞ」と声をかけ、2人は頷き、ブラッ
ディアークル、アークルを腰に出現させる小狼、ユウシ、ダークデ
イケイドライバーを腰に装着する龍夜。

「通りすがりの仮面ライダーだ。 覚えておけ」

そしてカードをドライバーに装填する龍夜。

「「「行くぞ、俺達の、変身!!!!」」」

『カメンライド・ダークデイケイド!』

龍夜は仮面ライダーダークデイケイド、小狼は仮面ライダーダークウガ・
マイティフォーム、ユウシは仮面ライダーブラックウガに変身。

そしてダークライドブッカーから6枚のカードが飛び出し、失われ
た力を取り戻した。

ダークライドブッカーソードモードでグロンギ達を斬りつけるダー
クデイケイド。

クウガは格闘技でグロンギ達を攻撃して行き、ブラッククウガは敵から武器を奪い取ってブラッディソードに変換し、グロンギ達を次々切裂いて行く。

「あいつには一気にトドメ行くぞ」

「「ああ!!」」

カードをドライバーに装填するダークディケイド。

『ファイナルフォームライド・ククククウガ! ブブブブラッククウガ!』

「ちよつと我慢しとけ」

「「えっ?」」

ダークディケイドがクウガとブラッククウガの背中に触れると2人が超絶変形し、クワガタの様な「クウガゴウラム」と、こちらも似た姿だが、全体的に黒く、角が4本の「ブラックゴウラム」に超絶変形。

「これは……?」

「これが、俺とお前達の力だ!!」

『アタックライド・イリユージョン』

さらにカードをドライバーに装填したダークディケイドは、実体のある2人に分身し、それぞれクウガゴウラムとブラックゴウラムに乗る。

「はあああ!!」

衝撃波を放つガミオだが、ダークデイケイド達はそれを避け、クウガゴウラムがまずその角とダークデイケイドのダークライドブッカーソードモードでガミオを切裂き、ブラックゴウラムとその上にいるダークデイケイドも同じ様に攻撃を繰り返す。

「ぬわあああ！！！？」

『ファイナルアタックライド・ククククウガ！　ブブブブラッククウガ！』

カードをドライバーに装填するダークデイケイド。

「決めるぞ、小狼」

「ああ！！」

まず、クウガゴウラムの角とデイケイドの飛び蹴りを繰り返す必殺技「ダークデイケイドアサルト」がガミオに炸裂。

「こっちも行くぞ、ユウシ！！」

「何時でも！！」

次にブラッククウガとダークデイケイドもダークデイケイドアサルトに似た「ダークデイケイドブラッディアサルト」を繰り返すし、ガミオに直撃する。

「ぬわああああ！！！！？」

直撃したガミオは爆発し、炎に包まれ、地上へと落下した。

元の姿に戻るクウガとブラッククウガ、そして1人に戻るダークデイケイドは降り立つ。

「お前の魂も、俺が背負う」

「ふん、許さないと云っておいて変な奴だ……」

「かもな」

最後にそんな言葉をガミオとダークデイケイドは交わし、ガミオは爆発を起こした。

「闇が、晴れるぞ……。ぬわあああ!!!?」

こうして、クウガとブラッククウガの世界での役目は終えた。

変身を解いた3人は別れを告げることに。

「じゃあな、2人とも。みんなの笑顔を守れよ?」

「分かってる」

「おう、任せろって♪」

龍夜は小狼とユウシに微笑んだ後、ダークデイケイダーに乗って家へと帰った。

＊

家へと帰った龍夜は、ライハに抱きつかれ心配された。

「心配したんだから!! もう!!」

「ご、ごめんな? でもほら、危なかったし……」

ライハは現場の場所を知らされておらず、龍夜も言わなかった為、

龍夜がどこに行ったか知らなかったので結局ここにいることになったが、ライハは心配しながらも龍夜を待っていたのだ。

「でも、信じてたよ、龍夜が帰って来てくれるの……／＼」

少し頬を染めながらそう言うライハのことを「可愛い」と感じる龍夜。

その時だ、背景ロールの絵が変わり、そこには中央に太鼓があり、その後ろには「白い獣」がいた。

次の世界は……「響鬼と歌舞鬼の世界」である。

＊

次回予告。

ヒビキ

「龍夜さん、分かりますよ、その気持ち。僕も似た様な感じでしたから」

ましろ

「ふえ……、ゆ、ゆーりしゃん……?」

龍夜

「オロチに勝つには、仲間の鬼を集めるしかねえだろ」

次回『たゆたう響鬼と7人の戦鬼』

全てを破壊し、全てを繋げ！

第3話 『変身』 (後書き)

響鬼×タユタマは関係無しです。
でもそちらもよろしくお願いします。

第4話 『たゆたう響鬼と7人の戦鬼』（前書き）

7人の戦鬼と同じく衣服は消滅しません。

後、太魂依のことはまだ未定です。

OP 「The fire every day」
ED 「少年よ」

第4話 『たゆたう響鬼と7人の戦鬼』

次の世界へ辿り着いた龍夜とライハ。

今回は戦国時代を思わせる服装となる。

「今度は随分と昔な感じの服だな」

「だね」

目の前に広がる光景は1つの村という感じであり、龍夜達の家も見
た目が村人たちが暮らしている様な家になっていた。

「おーい!! また……オロチが生け贄を捧げと!!」

そこへ1人の村人が大声でそんな事を言っており、龍夜とライハは
詳しく話を聞いてみる事に。

話によると、前々からこの村の近くにある海にオロチとそれを育て
る童子と姫が住んでおり、1週間に1度、若い女を生け贄に捧げな
ければならないらしい。

そしてそれが今日、また行われることになったのだ。

「助けにいかないと……」

龍夜は今日生け贄にされる少女を助けに行こうとするが、ライハに
止められる。

「待って! オロチって凄く強いんでしょ!? 童子も姫も!」

「だからって放っておけるか、この世界のライダーを見つけるのは後だ」

強い目でライハに言う龍夜。

結局2人は少女を助けに行くことになった。

その頃、1人の青年がこの村に足を踏み入れ、懐かしいものを見る様な目で村の様子を見ていた。

「久しぶりだなあ、ここにくるのも」

彼の名は「裕理^{ゆり}」、又の名を……。

「でもちよつと苦勞しそうだ」

「ヒビキ」である。

＊

海辺。

「生け贄を捧げよ」

童子と姫の声がし、童子と姫が現れる。

村人たちは生け贄の少女から離れており、もしも近づけば童子と姫に殺される。

少女は泣きながらも自分の死を待っている。

それを影から見ている龍夜とライハ。

「行くよ、龍夜」

「ああ」

ライハは腰に「ユウキベルト」というベルトを腰に装着し、龍夜はダークディケイドライバーを腰に装着。

パスのようなものを取りだし、ユウキベルトの前にかざすライハ。

龍夜はカードをドライバーの中央に装填。

「変身!!」

『スカルフォーム』

『カメンライド・ダークディケイド!』

ゴーストの様な仮面の戦士「仮面ライダー幽汽スカルフォーム」と「仮面ライダーダークディケイド」に変身したライハと龍夜。

「てりゃあ!!」

幽汽は本来はゴーストイマジンを所有する剣をどこから取り出し、
ダークデイケイドはダークライドブッカードモードで姫と童子
を斬りつけ少女から離れさす。

「鬼か？」

「鬼じゃないんだよな、それが!!」

ダークデイケイドは童子、幽汽は姫と戦いあう。

姫と童子は剣を使い応戦、ダークデイケイドはカードを1枚取り出
して装填。

「変身」

『カメンライド・ブラッククウガ!』

ユウシと同じブラッククウガに変身するダークデイケイド。

「「変わった？」」

姿を変えたダークデイケイドに多少動揺する姫と童子だが、Dブラ
ッククウガの持っていたダークライドブッカードがブラッディソード
に変換され、ブラッディソードを童子に振り下ろすが童子は剣で受
け止める。

「やああ!!」

剣を振るう幽汽、だが姫は避けた後一気に幽汽に詰め寄り剣で斬り
つける。

「うわ!？」

「邪魔をするな」

Dブラッククウガはブラッディソードをブラッディボウガンに変換し、銃口を姫に向けるが童子に首を絞められる。

「うわあ!?! 離せ!?!」

その時だ……。

「ヒビキ」

リーンという音が聞こえると、崖の上から炎に包まれた先程のヒビキ（裕理）が飛び降りて来たのだ。

着地し、腕で炎を振り払うと青黒い鬼……「仮面ライダー響鬼」が姿を現した。

「はああ……てりゃああ!!」

響鬼はDブラッククウガの首を絞めている童子を蹴り飛ばした後、幽汽と戦っている姫に棒型の武器「音撃棒・烈火」を取りだし、烈火で姫を叩きつける。

「はああ!!」

「ぬわあ!?!」

「仮面ライダー響鬼……」

Dブラッククウガは響鬼の名を呟き、自分も響鬼と幽汽と共に姫と童子に戦いを挑む。

しかし、海からオロチが出現し、炎をDブラッククウガ、響鬼、幽汽に放ってきた。

「グオオン!!」

「「「うわあああ!!!?」」」

3人は吹き飛ばされ、変身が強制解除される。

「ここは一旦退くしかないか……」

「でもあの子を助けないと!!」

上から順に龍夜とヒビキが喋り、ヒビキは急いで少女の元へ行くが時すでに遅し……少女はオロチに食べられてしまった。

「ッ……!!」

「くそ!!」

仕方なく撤退するヒビキ、龍夜、ライハ。

＊

その後、この村の村長の家へと村人たちが集結していたのだが……。

「村長、僕がいない間にこんなことになって……」

悔しいという気持ちでヒビキは一杯だった。

少女を救えなかったのもあるし、早く帰ってくればという気持ちもある。

ヒビキはこの村を守る鬼なのだが、よくこの世界の人間を喰らう怪人「魔化魍」を退治する為。

因みに、龍夜達は既に自分達のことをヒビキに話しており、なんとか信じて貰えた。

「しかし、ヒビキでも勝てぬとなるとどうしたものか……。あれから姫と童子から連絡があつてな、次の生け贄は……」

次の生け贄となる人物の名前を村長から聞いてヒビキは驚愕した。

「ましろじゃ……」

「ましろ」、ヒビキの妻であった。

「その証拠に生け贄の証である紋章を腕に刻まれ、幼い姿に戻ってしまい弱体化してしまっておる」

「そんな……ッ!!」

*

その後、ヒビキは龍夜とライハを連れてそのましろという少女の元に訪れていた。

「この子が、ましろ？　てか……狐耳？」

ライハはましろの頭に狐の耳があったのが気になったが、あえてこれ以上はなにも言わなかった。

「ましろ、大丈夫か？　帰ってきたよ」

ヒビキはましろの手を握って優しく語りかけるとましろは少し目を開ける。

「ふえ……、ゆ、ゆーりしゃん？」

「ああ、僕だよ？」

ヒビキの顔を見るとましろは凄く嬉しそうな顔をする。

ましろの頭を撫でるヒビキ、撫でられたましろはさらに嬉しそうな表情を見せる。

「えへへ……もっと撫でてー♪」

「元気になったな、ましろ」

ヒビキはましろに微笑み、龍夜がライハを見ると、ライハは龍夜を見て「僕も撫でてー♪」という目で見ていた。

「うっ……その目は……反則……！」

仕方なくライハの頭を撫でるとライハは嬉しそうに喜んでいたとか。その後、ヒビキと話しあった結果、今いるメンバーだけでは勝てない、だから仲間を集めて再びオロチと戦うという提案が出た。

龍夜とライハは一旦家に戻ろうとするのだが……。

「「んんっ！！？」」

偶然外を歩いている村人の男女2人を見て目を疑った。

何故なら、それは前の世界で出会った小狼とさくらだったからだ。

「小狼、さくら！！」

「ほ、ほえ！？」

「えっ？ あ、風上！！」

小狼が龍夜の名前を言ったことで本人であることが明確になった。

「なんでお前等この世界に！？」

「実はですね……」

さくらが説明するには、小狼達の世界ではもう既に1年は立っており、その1年間クウガとブラッククウガはグロンギと戦い続け、そして遂にそのボスである「ン・ダグバ・ゼバ」と戦い、勝利した。

戦いを終え、小狼とさくらはある日、灰色のオーロラに飲み込まれ、そして龍夜達がくる2日前に、この世界に来てしまったのだ。

「でも丁度いいや、俺達が鬼達を集めて帰ってくるまで念の為に…

…」

「分かってる。 オロチのことだろ？」

小狼もあの生け贄に捧げられた少女を助けようとした、だが村人達に必死に止められ小狼はいくことが出来なかったのだ。

龍夜は真剣な表情で小狼の肩に両手を置く。

「頼むぞ」

「ああ」

さくらは少し、複雑な気分でもあった。

自分には小狼を助ける力が無いと……、それを察したのか、ライハがさくらに話しかける。

「さくらは、小狼の傍にいただけでいいと思うよ？」

「ほえ？ どういうことライハちゃん？」

「好きな人が傍にいるだけで、力って湧くものだと思うし、それは小狼もなんじゃないかな？」

ニツと笑うライハに、さくらもつられて笑った。

その後、鬼達を探しに行く事になったわけである。

だが行く際、ましろが体調が悪いのに見送りに来たのだ。

「ましろ！？ 寝てなきゃダメだろ！？」

「ご、ごめんなさい……。 でも、ゆーりしやんをみおくりたくて……」

耳を垂らしてシュンツとなるましろ。

「ありがとう、でも、無茶はしちゃだめだよ？」

「はい、ゆーりしゃん……」

そしてヒビキとライハと龍夜は仲間の鬼を探しに出かけるのだった。

＊

1時間半ほどとある村に辿り着いた龍夜達。

そこでは等身大の鎧武者の魔化魍「火焰大将」が暴れて人を喰らっており、その前に青い髪の女性が立ちほだかる。

「これ以上この村で暴れるなら痛い目見るわよ？」

女性は黒い「変身音叉」というアイテムを取りだし、角で音を鳴らすと額に当て、華吹雪が舞、それを振り払うと歌舞伎を思わせる「仮面ライダー歌舞鬼」に女性……本名「アメリ」が変身した。

「はああ……やああ!!」

龍夜達は歌舞鬼と火焰大将の戦いを伺っている。

「俺達も戦わなくていいのか？」

「心配無いよ、龍夜。 アメ……カブキは強いから」

歌舞鬼は「音叉剣」という刀を使い、火焰大将と斬り合いとなる。

「うおりゃー!!」

歌舞鬼は火焰大将を蹴りあげ、音叉剣で火焰大将を斬りつける。

だが負けじと火焰大将も刀から炎を歌舞鬼に放ってきて歌舞鬼に直撃。

「あつッ!？」

すぐに火焰大将から離れ、歌舞鬼は音叉剣をしまい音撃棒に似た「音撃棒・烈翠」を取り出してそれで火焰大将を叩きつける。

「ぐぼお!？」

「どうだァ!!!？」

吹き飛んだ火焰大将は砂の様に崩れ去り、消えさる。

「やり〜♪」

変身を解くアメリ、鬼としての名前は「カブキ」である。

「カブキ〜!」

ヒビキがカブキを呼び、駆け寄る。

「あつ、ユウ！」

「いや、ヒビキだから」

「いいじゃん、それよりどうしたの？」

ヒビキはカブキに事情を話し、カブキも納得して一緒に仲間を探してくれることになり、龍夜、ライハ、アメリ、ヒビキは次に「イブキ」なる人物に会いに向かった。

第4話 『たゆたう響鬼と7人の戦鬼』 (後書き)

今回予告なし！

第5話 『集める仲間』（前書き）

結局響鬼編は3話構成になります。

第5話 『集める仲間』

カブキを加えてヒビキ、龍夜、ライハは「イブキ」という人物に会いに行く事になった。

「イブキさんってなんか鬼の力のおかげで今じゃお城のお姫様だつて聞いたけど？」

「ああ、あの人は鬼の中で出世頭だからね」

ヒビキのカブキのその会話の内容からイブキもまた女性のようにである。

そしてとある城に辿り着き、その城の姫をやっている「イブキ」、本名「美冬」^{みふゆ}に会いに城の中へと入る。

「ヒビキ、カブキ！ 久しぶりだなあ」

彼等の前に金髪の女性のイブキが現れる。

「お久しぶりですイブキさん」

ヒビキとカブキは頭を下げて挨拶、それに続けて龍夜とライハも頭を下げる。

「そちらは？」

イブキは龍夜とライハを見て尋ねる。

「単刀直入に言う、アンタの力を貸してくれ。オロチを倒す為に」

龍夜がそう頼み、イブキは即答でOKを出した。

「即答って、もう少し悩んだりするかと思ったんだけど……」

ライハが呟くがイブキは笑って「仲間が助けを求めるなら当然だ」と答えた。

当然そんなことを家臣達が許す筈も無かったがイブキ、ヒビキ、カブキ、龍夜、ライハは家臣達を払いのけ、城から出て行こうとする。

「こういう暮らしも私はそろそろ飽きていたのでな、丁度いい」

しかし、扉前には刀を構えた家臣が何人も龍夜達を逃がすまいと立ちはだかるが、スライムのような身体をした「太魂依」と呼ばれる妖怪にも酷似した存在であり、その中でも「3強」と呼ばれている者の1人「鵺^{ぬえ}」が現れて家臣達を払いのける。

「邪魔じゃ！ 行け、美冬！！」

「鵺、すまない！！」

イブキは鵺の助けを借りて龍夜達と城から抜け出し、そのまま次の仲間である「トウキ」の元へと向かう。

*

とある神社。

「ここがトウキって人のいる場所か」

龍夜がそう呟き、ヒビキは「そうだ」と答える。

「トウキさんは鬼の力を通して仏の声を聞けらしいのよね」

とそこでトウキという男性が出てきた。

「「トウキさん!!」「」」

「お前達、行くぞ」

いきなりそんなことをトウキが言いだし、「えっ?」となる一同。

「仏の声を聞いた、ヒビキ、お前の妻が予定より早く生け贄にされてしまう」

「どういうことですか!?!」

ましろも太魂依と呼ばれる存在であり、その頂点とも言える「綺久^{きく}羅美^{らみ}」の化身。

つまり、ましろをオロチが食べればましろが受け継いだ綺久羅美の力はオロチの物となる。

どこでましろのことを嗅ぎつけたかは不明だが、童子と姫はそんなことに気付いたのだろう。

「ヒビキ、そんなこと絶対にさせないぞ」

「ああ、分かっている。絶対にましろを守って見せる!!」

上から龍夜とヒビキが喋り、一同は急いで村へと戻るのだが……。

彼等の前の前に灰色のオーロラが現れ、紫色の蛇の仮面をした「仮面ライダーストライク」が現れる。

「ふうん。俺の遊び相手は……お前等がしてくれるのかい？」

「何故にストライク!？」

龍夜は何故か王蛇では無く、海外版の王蛇であるストライクが出てきた事に疑問を抱いたが龍夜はヒビキ達に先に行くように言う。

「えっ? でも……」

「こいつの狙いは俺だ。ライハもみんなと一緒に行け!」

ライハは頷き、ヒビキ達に先に行くように言う。

「大丈夫だよ、龍夜は後から来てくれるから」

そうやってヒビキ達にライハは笑いかけ、ヒビキはライハが龍夜を凄く信頼しているのを彼女の目を見て分かった。

「分かった、じゃあみんな行こう!!」

「変身!!」

『カメンライド・ダークディケイド!』

龍夜はダークディケイドライダーの中央にカードを装填して「仮面ライダーダークディケイド」に変身し、ストライクにダークライドブッカーソードモードで斬りかかるが、王蛇は蛇の形をした杖「ベノバイザー」で受け止める。

その隙にヒビキ達は村へと向かった。

「チッ、他の奴等は逃がしたか。 まあいい、お前だけでも遊んでくれるならなあ!!」

ストライクはダークデイケイドの腹部を蹴りつけ、ベノバイザーに腰の中央にあるカードデッキから1枚カードを引き抜き装填する。

『ソードベント』

剣型の武器「ベノサーベル」をストライクは構えてダークデイケイドに襲い掛かってくる。

「アハハ!! 楽しませてくれよ俺を!!」

「お喋りが過ぎるぞ、お前」

ベノサーベルをダークデイケイドに振りかざしたがダークライドブツカーで受け流し、そのまま横一戦にストライクを斬りつける。

「ぬおう!? そうこなくちゃな」

首を廻してゆっくりとダークデイケイドに近づいてくるストライク。

「でりゃああ!!」

再びダークライドブツカーでストライクにダークデイケイドは斬りかかったがストライクはベノサーベルでダークライドブツカーを弾いてダークデイケイドの腹部に強烈なパンチを繰り出す。

「ぐわあ!?!」

「どうした? もっと楽しませろ、俺を!?!」

うずくまったダークディケイドを蹴りあげ、不気味な笑いをあげるストライク。

「こうなりゃこいつだ!!」

『カメンライド・クウガ!』

ドライバーにカードを装填し、小狼と同じ「Dクウガ・マイティフォーム」に変身するダークディケイド。

「姿が変わっただと!?!」

Dクウガはストライクの振るうベノサーベルでの攻撃を避け、ストライクの顔を殴りつけてベノサーベルを奪い、さらにカードをドライバーに装填。

『フォームライド・クウガ! タイタン!』

紫色の鎧を纏ったパワーと防除に優れた戦士「Dクウガ・タイタンフォーム」に変わり、ベノサーベルはタイタンソードという剣に変化され、タイタンソードでストライクを斬りつける。

「ぬわああ!?!?!」

『フォームライド・クウガ! ドラゴン!』

次に青いスピードが速くなった戦士「Dクウガ・ドラゴンフォーム」にDクウガは変わり、タイタンソードは棒状の武器「ドラゴンロッド」に変化。

ドラゴンロッドをストライクに叩きつける。

「せいやあああ!!」

「ぬおおう!!?」

「こんなことして何になる!? 俺はお前と戦いたくは無い、同じライダーだろ!!」

Dクウガはストライクに言いかけるが、ストライクはそれを鼻で笑う。

「フン、ライダー同士は潰し合う為に戦う。それだけいいんだよ!」

＊

一方その頃、ヒビキ達はましろを助け出してヒビキは「仮面ライダー響鬼」、カブキは「仮面ライダー歌舞鬼」、ライハは「仮面ライダー幽汽・スカルフォーム」、トウキは白熊の様な「仮面ライダー凍鬼」、イブキは青い線の入った「仮面ライダー威吹鬼」に変身して姫と童子と戦っていた。

刀を使う姫と童子、歌舞鬼と凍鬼は音叉剣という刀を使い、姫と戦っていた。

幽汽はゴーストイマジンの剣、響鬼は音撃棒・烈火、威吹鬼は銃型の「音撃管・烈風」で童子と戦っている。

童子が口から火球を響鬼と幽汽と威吹鬼に放ち、ダメージを与える。

「「うわああ!!?」」

凍鬼と歌舞鬼は姫を徐々に押していたが、鉄扇を姫は取り出して歌舞鬼を斬りつけた後、背後にいた凍鬼にすぐに振り向いて火を操り、凍鬼を攻撃。

「「わあああ!!?」」

「まだまだ行ける、喰らえ!!」

響鬼は童子に向かい口から青紫の炎「鬼火」を浴びせる。

「ぬううう!!?」

だがその時、オロチが出て来て口から巨大な火球を放ち、響鬼、幽汽、凍鬼、歌舞鬼、威吹鬼を吹き飛ばし、5人の変身が強制解除されてしまった。

「「きゃああ!!?」」

「「ぐわああ!!?」」

仕方なく、ヒビキ達は一旦引き上げることに。

その後、童子と姫は3日以内にましろを生け贄に捧げなければ村人全員を病にかからせて殺すと脅してきた。

ヒビキ、カブキ、イブキ、トウキは村長の家へと行きこれからのことについて話し合うことに。

「まさかあれほどの力とは……」

トウキは腕を組み、オロチの対策を考える。

「姫と童子も強い」

とイブキ。

「だったらさ、もっと仲間を増やせばいいんじゃない!？」

カブキの提案に「成程」と納得する一同。

「あ、あの、皆さん……」

そこへましろが入ってきた、体調が悪いにも関わらず……。

「ましろ!？ ダメじゃないか、寝てないと」

「で、でも、私のせいでみんなに迷惑を……」

しかし、カブキがましろの頭にポンツと緩いチョップをする。

「ふえ?」

「なに言ってるの？ あたし達、友達でしょ？ そりゃユウを取られたのは悔しいけどさ、でも友達が危ない目に合ってるのは見てられないから」

「カブキの言う通り、だから安心して、ましろ」

ヒビキはましろを抱きしめた後、ましろを寝かし、傍にいた。

＊

龍夜の家ではライハが戻っており、怪我している腕を抑えながら救急箱を探している。

「っ、ちょっと無茶し過ぎたかな。ヒビキ達に心配させたくないし、見せない様にしてたけど……」

彼等はましろを守ることを優先して欲しかった、だからライハは苦い顔をしながら痛みを堪え、傷を隠していたのだ。

しかし、家にストライクをなんとか追い払った龍夜が帰ってきた。

当然ライハの怪我を見て慌てて彼女に駆け寄る。

「ライハ！！ その傷、オロチに！？」

「えっと……」

「待ってろ、今すぐ手当てするから！！」

ライハの腕を傷の手当てをする龍夜。

椅子にライハを座らせ、龍夜はライハの腕に包帯を巻く。

「龍夜、ありがとう」

そう言ってライハは龍夜に微笑みかけ、その微笑みに顔を赤くしながらも龍夜は無言で頷いた。

(可愛い……なっ／／／／)

＊

その後、怪我をしているライハは小狼とさくらに預けさせて龍夜、ヒビキ、カブキ、イブキ、トウキはまた別の鬼の仲間を探しに行く事にしたのだが……。

巨大な大風に乗って空から鬼の1人の男性「キラメキ」がやってきた。

「おい！！！」

「キラメキ!？」

「助太刀に来たぜえ!!!」

キラメキは大風から飛び降りる。

キラメキを見て龍夜は一言。

「俺を呼ぶなああああ!!!」

「」「呼んでないけど!？」」「」

第5話 『集める仲間』 (後書き)

予告なし！

第6話 『集結する鬼達』 (前書き)

OP 「始まりの君へ」

ED 「少年よ」

第6話 『集結する鬼達』

「お前の様なお調子者がいても頼りにならん」

トウキはキラメキに言い、キラメキは「そ、そんな」 と泣き顔をする。

「トウキさん、いないよりマシですよ」

「鬼の仲間は多ければ誰でもいいですし」

ヒビキとカブキの説得によりトウキは承知し、他の鬼達を探しに向かう。

その時、瓦版が風によって龍夜の顔に落ちてきた。

「わっ!？　なんだ!？」

瓦版を見るとそこには「大盗賊ニシキ打ち首」と書かれていた。

「ニシキか」

「こいつは確か鬼の力を盗みに使う奴だったなあ」

上からトウキ、イブキが喋る。

「なんでもいいわ!　今は猫の手以上も借りたいくらいなんだから」

カブキの言う事は正しかった。

「そうだな、そのニシキって奴を助けに行こう」

龍夜がそう言った後、一同はニシキが打ち首を行われる場所に向かった。

＊

ニシキは両手を縛らせて外で座らせられており、打ち首を行う侍が刀を構えていて周りには様々な人が溢れていた。

ヒビキや龍夜達も既に到着しており、隙を見てニシキを助け出すつもりだった。

因みにその侍を見て龍夜は……。

「上〇さん？」

漫画版だったら結構渋い顔してましたね。

「最後になにか言い残す事はあるか？」

侍がニシキに尋ねる。

「アンタ優しいなあ。 下を向いて死ぬのは御免や、最後まで上を見て死にたい」

「よかろう」

侍はニシキの願いを聞き、ニシキは上を見上げ、侍は刀を振るったのだが……。

なんとニシキは刃で刀を受け止めてヘシ折ってしまったのだ。

「嘘オ？」

その隙にヒビキ達が出した弾幕を投げて白い煙を立たせニシキを助け出した。

その後、森の中で龍夜達がニシキが仲間になるように誘う。

「仲間になってもええけどお前等幾ら持つてんねん？」

（言うと思ったよ）

龍夜の予想通りの発言をするニシキ。

金を払わなければ仲間にならないと言い出したが、ヒビキと龍夜は……。

「残念だなあ、ヒビキの村には昔海賊が隠したお宝があるのに」

「未だに誰も見つけたことが無いみたいだし、まだ誰にも盗られて無いと思うなあ」

それに耳をピクツと動かせるニシキ。

「おっしや行くでお前等あああ！……！」

ころっと態度を変えるニシキ。

これで龍夜を含めて仲間はヒビキ、カブキ、イブキ、キラメキ、トウキ、ニシキと揃った。

また新しい仲間を探しながら歩いていると腕に鋏を持つ「バケガニ」の童子と姫、通常のバケガニの数倍の巨体差を持つ魔化魍「バケガニ」が雷の力を宿したギター型の武器「音撃斬・烈雷」を持った鬼、「仮面ライダー轟鬼」と鳥をモチーフにした様な鬼、「仮面ライダー羽撃鬼」が戦っており、バケガニと戦っているのは赤と青の巨大な鳥、「鳳」と「凰」である。

この2体は3強の内の1体「鳳凰」であるが、鳳凰は鳳と凰、2体で1体となる。

鳳凰は羽撃鬼と共に戦っていた為、ヒビキの村にはいなかった。

「あれはトドロキとハバタキ！」

ニシキ、キラメキはそれぞれ変身音叉を取り出す。

「ニシキ」

「キラメキ」

「変身!!」

ニシキは鯨をモチーフにした「仮面ライダー西鬼」と、虎をモチーフにした「仮面ライダー煌鬼」、そして龍夜は「仮面ライダーダークデイクイド」に変身し、苦戦している轟鬼達に加勢する。

西鬼と煌鬼はバケガニに飛びかかり、西鬼はトライアングル型の武器「音撃三角・烈節」、煌鬼は音叉剣でバケガニに飛びかかった際

仰向けに倒れこませてそれぞれの武器を突き刺す。

「皆さん！」

羽撃鬼も音叉剣でバケガニを突き刺し、バケガニは爆発して散る。

「大丈夫か？」

「アンタは誰や？」

ダークデイケイドは轟鬼に手を差し伸べる。

童子と姫がこちらに向かい襲いかかって来る。

「でやああ!!！」

だが轟鬼は烈雷を姫に突き刺し、烈雷の腰部にある弦を取りつけ弾き始める。

「音撃斬・雷電激震!!！」

清めの音が姫に流し込み、姫は爆発、ダークデイケイドは童子の攻撃を避けて背中を蹴りつけた後、カードをドライバーの中央に装填。

「ぬわああ!!!!？」

「童子とかでも良い気がしないけど……ごめんな」

『アタックライド・スラッシュ!』

ダークライドブッカーソードモードの刃を強化し、素早く敵を切裂く「ダークデイケイドスラッシュ」を連続で受けて童子は爆発を起こす。

「ぐわあああ!!?」

一同は変身を解き、轟鬼の正体は丸刈りのカブキやヒビキとそれほど年は変わらない青年「トドロキ」、本名は「三九郎^{さんくろう}」であり、羽撃鬼に変身していたのは青い髪に先程の鳳凰達が小さくなり今は頭に乗っている少女「ハバタキ」、本名は「ゆみな」という名前で、ヒビキの義理の妹である。

「やっと見つけましたお兄ちゃん達〜!」

「えっ?」

「お前等の話を聞いて駆けつけたんやで?」

トドロキがそう答え、彼等もまたオロチを倒す為の仲間が揃った。

「これだけはいれば勝てるよな、ヒビキ、カブキ!」

「もちろんよ龍夜!」

「ああ!」

意気込む龍夜だが、本心では戦いたくは無いが、童子や姫、魔化魍に説得が通じるとは思えない。

そして村に帰るまで途中で魔化魍に遭遇して戦いながら帰っていた為、村に帰って来たのが既に儀式が行われており、ましろが生け贄に出されていた。

「させるか! 変身!!」

しかし、小狼が「仮面ライダークウガマイティフォーム」に変身し、ましろをオロチから庇う。

「邪魔をするな！」

オロチは口から火をクウガに放ち、大きくクウガは吹き飛ばされる。

「ぐわああ!!?」

姫と童子がクウガに攻撃をしてくるが、なんとか童子の刀をクウガは奪い取りタイタンフォームにフォームチェンジ。

物質変換能力により刀はタイタンソードに変化してクウガは童子にタイタンソードで斬りつける。

「はあ!!」

「ぐう!？」

だがそこでオロチが巨大な手でクウガを叩き飛ばし、壁に激突。

「ぐわああ!!!!?」

「小狼くん！」

さくらがクウガに駆け寄る。

オロチはましろに向けて大きく口を開く。

ましろは肩を震わせ、ヒビキの名を心の中で呼んだ。

(ゆーりしゅん!)

その時、オロチの顔に炎の弾が直撃した。

「グオオオオ!？」

炎が放たれた方を見るとそこでは馬に乗った「仮面ライダー響鬼」と「仮面ライダー歌舞鬼」と「仮面ライダーダークディケイド」が現れた。

「助けに来たぞ、ましろ!」

「お待たせまろまろ!」

さらには音叉剣を持った「仮面ライダー凍鬼」「仮面ライダー煌鬼」が現れる。

「仏の声を聞いた、戦いの時だ!!」

「おっしや行くでえゝ!!」

鬼達の出現に対し、童子と姫は戦闘員の怪人である「化狐」達を呼びだす。

「埋蔵金の夢が見たいんじゃ!!」

「鳳さんと凰さんはオロチをお願いします!」

次に「仮面ライダー西鬼」、「仮面ライダー羽撃鬼」が現れる。

「私達も行くぞ!」

「おっしや、裕……ヒビキの村の為にもなあ!」

最後に「仮面ライダー威吹鬼」「仮面ライダー轟鬼」が現れ、響鬼とダークディケイド、そして……7人の戦鬼が揃った!

「さくら、俺はまだやれる」

クウガはさくらの肩に手を優しく置き、立ち上がる。

タイタンフォームからクウガは金色の個所が増えた雷の力を宿す「ライジングタイタン」となり、タイタンソードもライジングタイタンソードに変化。

「うおおおお!!」

クウガの魔化魍達に戦う姿を見てさくらは複雑な表情をしていた。

「さくら!」

「ライハちゃん」

さくらの元にライハがやってくる。

さくらの気持ちを察しているライハはさくらにこう言う。

「僕達にも出来ることはあるよ? 僕達も村の人達も、一緒に戦うんだ! まず村人の説得!」

ライハの言葉にさくらは「うん!」と心強く頷き、影で鬼達の戦いを見ている村人達の元へ。

「みんな! 聞いて!! これ以上あいつ等の言いなりになっていいの!?! ヒビキ達はあなた達の為に戦ってる、この村の為に! その想いに、あなたは答えなくていいの!?!」

ライハの台詞に村人たちは黙りこむ。

「勇気を出そう！ 絶対、大丈夫だよ！」

その時、村人の1人が童子の1人に襲いかかられたが……。

「「でりゃあああ！！！」」

響鬼、歌舞鬼、ダークデイケイドのキックを喰らい蹴り飛ばされる。

「村の人達に、指一本触れさせないんだからね！」

と歌舞鬼。

「俺達の為に……」

そして村人達も立ち上がり、武器を構えて魔化魍達に立ち向かう。

「鬼達ばかりに頼るなあー！！！」

「俺達の村は俺達で守るぞおー！！！」

因みに既にましろはある場所へ隠しており、森の中では響鬼、ダークデイケイド、歌舞鬼、威吹鬼、煌鬼以外の鬼達が戦っていた。

「おりゃああー！！！」

西鬼は化狐に飛びかかり地面に叩きつけて引きずりながら走り、木に激突させる。

「グギャア！？！」

「どうや！？！」

凍鬼は空中に浮きながら刀で斬りつけてくる姫の攻撃に苦戦していた。

「ぐわああ!!?」

凍鬼はどうか距離を取り、腰部にある丸い形の音撃鼓を外して空中に浮かせ金棒型の武器「音撃金棒・烈凍」を音撃鼓に叩き、そこから清めの音を姫に流し込む。

「音撃殴・一撃怒涛!!」

「ぐううう……ぐわああ!!?!?」

姫は爆発四散し、羽撃鬼は空中に飛びながら化狐を持ち上げて高い位置から投げ飛ばす。

「はああ!!」

煌鬼は化狐の5体を海に突き落とし、自分も海の中へと飛びこむ。

シンバル型の2つの武器「音撃震帳・烈盤」を持ち、回転しながら化狐に突っ込んで斬りつけて行く。

「でりゃああ!!」

『ぐしゃああ!!?!?』

「……」

砂浜で黙ったままの威吹鬼は銃型の武器「音撃射・烈風」で「鬼石」と呼ばれる弾丸を化狐に撃ちこみ倒して行く。

「うおおおお!!!」

同じく砂浜で轟鬼と童子は戦っており、互いに斬り合いとなっているが、轟鬼の猛攻攻撃により童子は刀を落としてしまい、轟鬼は烈雷を童子に突き刺し弦を弾くと童子は爆発した。

「とりゃあ!」

「うわあああ!!!!?」

鳳凰はオロチと戦っているが力はオロチの方が上である。

オロチの放った炎を喰らい、吹き飛ばされる鳳凰。

「「クエエエ!!!!?」」

トドメを刺そうとオロチは近づくが……。

「待ちやがれ!!!」

空中に白い龍、3強最後の1体、「応龍」が飛んでおり、応龍はオロチに向かい青い炎を吐く。

対するオロチは赤い炎を放ち相殺。

「噂で来て見りゃ面白いことになってるじゃねえか!」

彼は今まで1人で人間の姿で旅に出ており、旅の途中オロチの噂を聞き、ここまで来たのだ。

「俺も混ぜて貰おうか!」

「「キエエエ!!!!」」

応龍と鳳凰がオロチへと立ち向かう。

響鬼、歌舞鬼、ダークディケイド、クウガは化狐達を倒していたのだが、後ろを振り返ると着物を着た女性がいた。

「お前、魔化魍か？」

「どうして鬼どもはそんなに人間を庇い、守るんだ？ 人間は鬼を化け物扱いする者もいる、この村は兎も角、お前達はそんな奴等の為に戦うのか？ 下等な生物なんかの為に」

その魔化魍の言葉にダークディケイドは反論。

「こいつ等が人間を庇い、守るのはこいつ等も同じ……人間だからだ。どんなに他の人間から批判されようが、嫌われようが、それでも人を守る。だってこいつ等も……仮面ライダーだから」

ダークディケイドは響鬼と歌舞鬼の2人を見て響鬼と歌舞鬼は頷く。

「貴様、何者だ？」

「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ」

仮面の下で不敵な笑みを浮かべ、6枚のカードがダークライドブツカーから出てくる。

女性の魔化魍は死神と吸血鬼を合わせた様な魔化魍「ヒトミツ」となり、正体を現す。

槍と盾を持ち、ダークディケイド達に向かって行くが直後姿を消し、

突然巨大化したヒトミツの顔が彼等の前に現れ毒霧を吐かれて4人は吹き飛ばされる。

『うわあああ!!!?』

そしていきなり現れたヒトミツの槍での攻撃を喰らうダークディケイド達。

ダークディケイドに槍が振り下ろされた時、ダークディケイドは素早くヒトミツの背後に回り込み、近くにいた歌舞鬼と共にダークライドブツカーソードモード、烈翠で背中を斬りつけられる。

「はああ!!!」

「ぐわああ!!!?」

ヒトミツの身体に凍鬼の音撃鼓が張り付き、凍鬼が烈凍で音撃鼓を叩きつけヒトミツに清めの音を流しこむ。

「音撃殴・一撃怒涛!!!」

「ぐわあああ!!!?」

吹き飛ばされたヒトミツは次に羽撃鬼の必殺技を喰らう事になる。

「ぬッ!?!」

フルート型の武器「音撃吹道・烈空」から鬼石をヒトミツに撃ちこみ、フルートの様に吹いて清めの音を放つ。

「音撃奏・旋風一閃!!!」

「ぐおおおお!!!?」

烈盤をシンバルの様に叩いて清めの音をヒトミツに流しこむ煌鬼。

「音撃拍・軽佻訃爆!!」

「や、やめろ!　ぐわああ!!!!?」

次に西鬼が変身音叉で三角状にした烈節を叩き、清めの音をヒトミツに放つ。

「音撃響・偉羅射威!!　偉羅射威!!」

「ぐううう!!!」

さらに威吹鬼の放った鬼石を撃ちこまれ、ラッパ型の音撃モードにした烈風を吹き清めの音を放つ。

「喰らえ、音撃射・疾風一閃!!」

「ぐぬううう!!!」

次に轟鬼が烈雷を突き刺し、弦を弾く。

「音撃斬・雷電撃震!!」

「ぐおおおお!!!　おのれ!!」

ヒトミツは轟鬼の首を掴んで投げ飛ばす。

「ぐわああ!!!!?」

「「うおおおお!!!!」」

ヒトミツの腹部と背中に響鬼と歌舞鬼の音撃鼓が張り付き、2人の合体技を繰り出す。

「音撃二流打!!」

「ぐおおお!!!?」

「でりゃあああ!!!」

大きく空へと吹き飛んだヒトミツにマイティフォームに戻ったクウガの必殺キック「マイティキック」と3Dゲートを通りぬけて繰り出すダークデイケイドの必殺キック「ダークデイメンションキック」がヒトミツに炸裂し、ヒトミツは水の様な血を吹きだしながら爆発し、その爆発をバックに響鬼、歌舞鬼、威吹鬼、轟鬼、ダークデイケイド、クウガ、凍鬼、西鬼、羽撃鬼、煌鬼が並び立つ。

「バカなああああ!!!?」

そこで応龍と鳳凰を振り払ったオロチがダークデイケイド達に攻撃を仕掛けてくるが……。

『ファイナルフォームライド・ヒヒヒビキ! カカカカブキ!』

「少し我慢しとけ」

「「えっ?」」

響鬼と歌舞鬼の背中を触れると響鬼はディスクアニマル、アカネタカに酷似した「ヒビキアカネタカ」、歌舞鬼はディスクアニマル、ケスズミガラスに酷似した「カブキガラス」に超絶変形。

「「うわあああ!!!?」」

「変形した?」

ヒビキアカネタカとカブキガラスはオロチに向かい突撃して攻撃し、オロチを応龍と鳳凰が抑えつける。

「今だア!!」

『アタックライド・イリュージョン ファイナルアタックライド・ヒビヒビキ! カカカブキ!』

2人に分身したダークディケイド、ヒビキアカネタカとカブキガラスは音撃鼓の様な「ヒビキオンゲキコ」と「カブキオンゲキコ」に変形してオロチの背中に貼りつき、分身した2人のダークディケイドは響鬼と歌舞鬼の音撃棒を使い、音撃鼓を叩く必殺技「ダークディケイドウェイブ」と「ダークディケイドインパクト」を繰り返す。

「はあ!! よっ!!」

「俺達も行くぞ!!」

『おお!!』

他の鬼達もオロチに対して必殺技を放ち、耐えきれなくなったオロチは爆発を起こした。

「ギシャアアアア!!!!?」

＊

その後、オロチの呪いが無くなった為ましろは元の姿に戻った。

「結構美人なのな」

「いえ、そんな」

龍夜はましろを見て美人と言い、ましろは照れるが……。

「「フン!!」」

ヒビキとライハに足を龍夜は踏みつけられた。

「いっでえええええ!!!!?」

そして鬼達はそれぞれ帰り、ヒビキは龍夜達に別れを告げていた。

「また縁があつたら会おう、シュツ!」

手を廻して別れの挨拶をすると龍夜はも同じ様にして別れを告げた。

「色々とありがとうございました」

ましろは頭を下げたて礼を言い、龍夜、ライハ、小狼、さくらは家中へと入る。

「元の世界に帰るまで一緒だね小狼、さくら♪」

「うん、よろしくねライハちゃん♪」

小狼が背景ロールを見てそれが気になり、鎖を弄るとまた新しい絵が降りてきた。

「うわっ!?!」

その絵は「仮面ライダー龍騎」と「仮面ライダーリュウガ」と呼ばれる2人のライダーが互いに剣をぶつけ合っている絵がそこに描かれていた。

家の外では中年の帽子を被った男性が龍夜達の家を睨みつけていた。

「ダークディケイド、次の世界で貴様は終わる……」

＊

次回予告

王蛇

「さあ、祭りの時間だぜえ、破壊者さんよお!!」

まどか

「みんなキュウベえに騙されて……」

ライハ

「なんだろう、物凄いムカつく」

？

「このデッキを使い」

さくら

「変身!!」

次回『龍騎☆マギカ』

全てを破壊し、全てを繋げ！

第6話 『集結する鬼達』（後書き）

なんかヒトミツが……、まあ原作より頑丈という設定にしていますので、一応強さも。

7人の戦鬼でヒトミツを倒した時のシーンで鬼達がヒトミツの爆発をバックにしたあのシーンが自分的に気に入ってます。

たった1人でましろを守ろうとした小狼はマジ漢だと思う。

次回は龍騎☆マギカですが、アビスを含めても14人以上ライダーが存在します。

さらに次回はドラゴンナイトの設定も組み込んだ世界感になります。

第7話 『龍騎☆マギカ』 (前書き)

予告と違ってたり、世界感はまどマギを元にしたものとなっています。

OP 「コネクト」

第7話 『龍騎☆マギカ』

夜の龍夜の家。

「……んっ？」

なにか布団に違和感を感じ、布団をめくって見るとそこにはライハがスピーッと眠っていた。

「うにゅ」

ライハが寝返り、パジャマのボタンの上の部分が3つほど外れている為胸元が見え、それを見た龍夜は一気に顔を赤くした。

（ちゃんと着ろよ／＼／＼／＼）

「龍夜あ」

寝言のように龍夜の名を呟き、ライハは龍夜の身体に抱きつく。

「お、おい／＼／＼／」

顔を真っ赤にし、そんな状態で龍夜の眠れない夜は続いた。

翌日、見滝原中学校という学校の生徒の役割が龍夜、ライハ、小狼、さくらに与えられていた。

その為、彼等の年齢は若返っており、ちゃんと中学生くらいの身長となっている。

「ほえ、中学生になっちゃった」

「取り合えず、その中学校に行けばいいんだよね？」

小狼の質問に龍夜は「ああ」と答えた後、その中学校に龍夜達は向かい、ある教室にて転校生ということで入学してきた。

「えーっと、それじゃライハさんと龍夜さんは鹿目さんと美樹さんの隣の席でいいかしら？」

「はい」

「僕もいーよー！」

担任の教師に言われ、龍夜とライハはそれぞれピンクの髪をした少女「鹿目まどか」と「美樹さやか」の隣に座る。

「私、鹿目まどかです。 よろしくね？」

「ああ、こっちこそ。 風上龍夜だ」

龍夜はまどかに微笑みながら返し、少しライハが不満な表情を見せていたがさやかがライハに挨拶してきた為ライハもそれを返す。

「同じ青髪だし、仲良くやれそうな気がするよアンタとは」

とさやか。

まあ、バカとアホの子ですからね。

「「今なんか失礼なこと言われた気がする」」

その後の昼休み。

ライハは龍夜に弁当を作ってきており、小狼とさくらも誘って屋上で食べていた。

「うん、美味しいよ、ライハ。これ美味しい!!」

「えへへ、そうでしょ？」

にこにこ笑うライハの頭を撫でて褒める龍夜。

「愛妻弁当か」

ボソッと小狼が呟くと龍夜は顔を真っ赤にした。

「お、お前だってそうだろ!／＼／」

龍夜の言う通り、小狼もさくらの手作り弁当を食べていた。

＊

その頃、まどかとさやかは鏡の中から「キューイイーン」という音が聞こえ、急いで人気のない鏡の場所に立つとまどかは龍の顔の紋章が刻まれたカードデッキ、さやかは蝙蝠の紋章が刻まれたカードデッキを取り出し鏡に掲げると、2人の腰に銀色のベルト「Vバックル」が装着される。

「変身!!」

まどかは赤い仮面の龍騎士、「仮面ライダー龍騎」、さやかは青い蝙蝠の騎士、「仮面ライダーナイト」に変身した。

龍騎とナイトは鏡の世界、「ミラーワールド」に突入。

一方、まどか達と同じ様に、鏡から聞こえる音が聞こえた龍夜は急いで鏡のある場所へ行く。

「龍夜!？」

ライハ達が急いで龍夜の後を追ひ、龍夜がある鏡の前でなにかを見ているのを発見。

「なにか見えるんですか？」

さくらが尋ねると、龍夜は頷く。

「ああ、ミラーワールド、それがこの世界のライダー達が戦うフィールドだ。ディケイドタイプやこの世界と同じタイプのライダー達で無いと入れない世界」

つまり、今回は小狼もライハも戦闘には参加出来ないということである。

「頑張って」

それだけ言うとライハは龍夜の頬にキスする。

「／／／／／」

「これくらいは、いいかなって／／／／」

頬をポリポリかいて照れるライハに、龍夜は「有難う」と答えた後、ダークディケイドライバーを腰に装着し、カードを1枚ドライバーに装填。

「変身！！」

『カメンライド・ダークディケイド！』

「仮面ライダーダークディケイド」に変身した龍夜は急いでミラーワールドに突入。

ミラーワールド内では龍騎とナイトがヤゴ型のモンスター、「シアゴースト」と戦闘をデパートの中で繰り広げており、シアゴースト達は集団で龍騎とナイトに襲い掛かるが、そこで緑色の機械的な牛をモチーフにした「仮面ライダーゾルダ」が銃型の武器「マグナイザー」でシアゴーストを撃ち抜いた。

「「ゴォ!?!」」

「「マミさん!!」」

ゾルダの名前は「巴^{ともえ}マミ」という少女が変身したライダーであり、次に剣型の武器「ベノサーベル」を構えたストライクと同じ姿をした「仮面ライダー王蛇」が現れ、シアゴースト達を次々切裂いていた。

「オラァ!!」

「杏子！」

王蛇の装着者は「佐倉杏子^{さくらきょうこ}」という名前で、龍騎達の仲間でもある。

「行くぜ、祭りの時間だあ!!」

「ハッ! やあ!!」

ゾルダはシアゴースト達を次々マグナバイザーで撃ち倒して行き、ナイトは剣型の武器「ダークバイザー」で王蛇と共にシアゴーストを切裂く。

その時だ、シアゴースト達が脱皮し、「レイドラグーン」というトンボ型モンスターに変貌。

飛行して龍騎達に襲い掛かる。

「脱皮しちゃった……」

龍騎は急いでカードの1枚をデッキから抜き取り、左腕の「ドラグバイザー」に装填。

『ストライクベント』

「やあああ!!!」

すると右手に龍の顔をした「ドラグクロ」が装備され、それを前に突き出すと龍騎の契約モンスター、龍型の「ドラグレッダー」が炎を放つ技「ドラグクロファイヤー」が空中のレイドラグーンの何体かに直撃しレイドラグーン達を焼き払う。

『グギヤアアア!!!?』

一方、地下駐車場にもシアゴーストがいる為、王蛇とゾルダはそこ

でも戦闘を繰り広げていた。

シアゴーストが口から糸を吐きだし、王蛇とゾルダの首を絞めつける。

「ぐわああ!!?」

「きゃああ!!?」

そこへ、ダークディケイドが現れ、ダークライドブッカーソードモードで糸を切裂いてゾルダと王蛇は解放される。

「けほけほ……。テメー、鳴滝とかいうオッサンが言ってた破壊者じゃねえか!!?」

「……助けたのに破壊者呼ばわりか……」

ダークディケイドはやれやれと言った声で呟き、王蛇はベノサーベルを構えるがゾルダが制止した。

「なにすんだよマミ!?!」

「彼は私達を助けてくれた。本当に破壊者なのかしら……?」

ゾルダの言うことに一理ある為、王蛇は黙りこんだ。

先程のシアゴースト達がこちらに向かい襲いかかるが、ダークディケイドはカードを1枚取り出しドライバーに装填。

『カメンライド・ヒビキ!』

ダークディケイドはヒビキが変身していたライダー、「D響鬼」に変身。

「姿が変わった」

『アタックライド・音撃棒・烈火』

音撃棒・烈火を取り出し、先端の鬼石に炎を宿す。

「頭を下げる！」

「「えっ？」」

「早く!!」

言われた通りに2人はすると鬼石に宿った炎をシアゴースト達に放ちまくり、シアゴースト達は燃え尽きていく。

『ギシャアアア!!!?!?』

＊

一方、龍騎とナイトは一通りモンスター達を全て倒したのだが……。こちらに向かい、ゆっくり歩いてくる龍騎そっくりの黒いライダーに2人は気付いた。

「仮面ライダーリュウガ」である。

「ほむらちゃん……!」

装着者は「あけみ暁美ほむら」という少女。

リュウガは剣型の武器「ドラグセイバー」を持ち、龍騎とナイトに襲い掛かった。

「はあああ!!」

「きゃああ!!?」

「うわああ!!?」

龍騎とナイトは斬りつけられ、リュウガは龍騎の首を持ち、腹部を殴りつける。

「フン!!」

「うう!」

「やめろよ転校生!! アンタどうして!!」

ナイトは大剣「ウイングランサー」をリュウガの背中に振りかざすが、リュウガはウイングランサーを片手で受け止めてしまい、龍騎をナイトの方へと放り投げた。

「きゃああ!!?」

「ぐわああ!!?」

リュウガがゆっくりと倒れこんだ龍騎とナイトに近づくが、リュウガの背中が突然火花を散らした。

「うう!」

リュウガが振り返るとそこには王蛇とゾルダ、そしてダークライドブッカーガンモードを構えたダークデイケイドがいた。

「リュウガ、いや暁美ほむら、お前こいつ等の友達なんだろ？ だつたらなんでこんなことする！？」

しかし、リュウガは何も答えず、カードをドラグバイザーに酷似した「ブラックドラグバイザー」に装填。

『アドベント』

黒いドラグレッダー、リュウガの契約モンスター、「ドラグブラック」が現れ黒い炎をリュウガ以外のライダー達に吐きだす。

『うわあああ！！！？』

その混乱に生じてリュウガは姿を眩ませた。

＊

現実世界で白く、兎と猫を合わせたような生物「キュウベえ」がライハ達の前に現れており、いきなり訳の分からないことを言い出した。

「僕と契約して、仮面ライダーになってよ！」

当然、小狼、さくら、ライハの反応は「はっ？」という感じの反応である。

そこで龍夜がまどか達を連れて帰って来て、龍夜はキュウベエの頭を掴み、外へと放り投げた。

「龍夜!？」

「それに鹿目達……」

その後、放課後に龍夜達の家に、まどか、さやか、マミを連れて行き、この世界について説明をお願いした。

この龍騎とリュウガの世界は、キュウベエとの契約によりライダーは生まれる。

願いを1つ叶える代わりにモンスターと戦う使命を背負う、しかし、実はこの世界に存在するモンスター、シアゴーストやレイドラグーンのような複数存在するモンスターは別だが、それ以外のモンスターは実は全て元々はライダーに変身していた「人間」なのである。

ライダーに変身していた人間はカードデッキを破壊された場合や、モンスターにより敗北し、食べられたりした場合に、モンスターとになってしまう。

「自分達がモンスターになるとしても、モンスターと戦い続けるのか？」

龍夜の問いに、マミが答える。

「モンスターは人を食す。モンスターが元々人なのは抵抗があるけど、それでも私達は今平和に暮らしてる人達を守りたい」

「それが私達が戦う理由……かな？」

マミの次にまどかが答え、ライハは契約した内容を聞いてみることに。

「あたし達は最初から真実を知ってたね。でもあんな奴等を見て見ぬフリ出来ない。だから仮面ライダーになった。そして契約の内容は、あたし達がモンスターにならないってこと」

「最初はライダーの人達は全員モンスターにならないようにって願ったんだけどね。流石に限界があるみたいなんだよ」

上からさやかと杏子が言い、龍夜はリュウガについて聞いてみることに。

「あのリュウガはお前達の友達なんだろう？　なんでまどか達を襲ったんだ？」

不思議そうに尋ねる龍夜。

「分からないんです。　どうしてほむらちゃんが私達を襲ったのか……」

暗い口調で喋るまどかに、龍夜は「ごめん」と謝罪した。

「いえ、そんな謝らなくても！」

その後、まどか達は帰っていった。

第8話 『それが私の願いだから』 (前書き)

OP 「コネクト」

挿入歌 「果てなき希望」

第8話 『それが私の願いだから』

あれから翌日が立ち、さくらは買い出しに出かけておりその帰りのこと。

「えーっと、大根、ちくわ、たまごを買って……。 うん、これでいいね♪」

あからさまにどこぞの1億稼ぐ仮面ライダーが好きそうな料理を作る気満々である。

その時、「キュイイイン」という音が聞こえ、これは近くにミラーモンスターがいるという証拠。

同時にさくらはモンスターに狙われているのだ。

レイヨウタイプ型のモンスター、「ギガゼール」が3体現れ、さくらに襲い掛かった。

「きゃっ!?!」

だが……。

「さくら!?!」

小狼がさくらを抱えてギガゼールを避ける。

「ほえ!?! 小狼くん!?!」

小狼がいきなり現れた事に驚いたが、冷静になって今の状態をさくらは見ると自分がお姫様抱っこされており、その事に顔を真っ赤にするさくら。

「ほえ／＼／＼／」

さくらを降ろし、小狼は構えをとってアークルを出現させる。

「変身!!」

赤きクワガタのライダー、「仮面ライダークウガ・マイティフォーム」に変身し、クウガはギガゼールに戦いを挑むがギガゼール3体は近くに停めてあった車の窓の鏡の中からミラーワールドの中に戻り、クウガは警戒して辺りを見回す。

(どこから攻めてくる……?)

すると背後にあった車の窓ギガゼール2体の飛び蹴りが繰り出される。

「ぐわあ!!?」

「小狼くん!!」

クウガは構えをとり、緑の超感覚に優れた「クウガ・ペガサスフォーム」にチェンジ。

「大丈夫だ、心配なくていい」

クウガは仮面の下でさくらに微笑み、辺りを見回す。

『キュイイイン』

先程の2体がクウガの背後に回り込み、最後の1体が車の窓から飛び出してクウガに攻撃を仕掛けてきたが、何処からか出したボウガン型の武器「ペガサスボウガン」から矢……「ブラストペガサス」をギガゼール3体に一気に放ち、3体のギガゼールは爆発した。

「「「グギャアアア！！！！！？」」」

クウガは変身を解除してさくらに駆け寄る。

「さくら！ 無事か？」

「う、うん、小狼くんが守ってくれたから……」

無理に笑顔を作っていそうなさくら。

そんなさくらを、小狼は心配していた。

その後、家に帰った後、さくらは1人、自分の使っている部屋で考え事をしていた。

（ライハちゃんはああ言うけど、けどやっぱり私も小狼くんや、龍夜さん達の力になりたい。私だって戦いたい……！）

そんなさくらの元に、キュウベえが現れる。

「へえ、それならいい方法があるよ！」

「あなた……」

「僕はキュウベえ！ 僕と契約すれば君は仮面ライダーの力を手に入れることが出来るよ？」

どうやらキュウベえは龍夜達がまどか達と出会った事を知らないようだ。

龍夜が即、キュウベえを外に捨てたので、まどか達の姿を見ていなかった為である。

さくらは悩む、確かに力は手に出来る。

「ホントに……?」

「もちろんだよ!」

「考える、時間を頂戴」

そのままさくらは外に出て行く宛ても無く、歩いていると、まどかに偶然外で出会った。

「あつ、まどかちゃん」

「さくらちゃん!」

ある公園まで2人は行き、ブランコに乗ってまどかはさくらの悩みを聞いていた。

「まどかちゃん達と同じように、自分がモンスターにならないようにってお願いすればいいんだろうけどそれでも、私がそんな力を手にしているのかなって思って……、それに、戦ってなんだか怖いし……」

さくらは隣に座っているまどかを見るとまどかはくすくすと笑っていた。

「同じだね、私と」

「えっ？」

「私も同じだったから」

まどかは目を瞑って語りだした。

自分も仮面ライダーになってみんなを守りたい、でもやはり戸惑いもあり、恐怖心もあった。

キュウベえが幾度となく、自分に契約を持ちかけたが、その度にまどかを守るため、彼女の親友であるほむらリユウガはキュウベえの妨害をしてきた。

因みに、キュウベえの目的はこの宇宙の寿命を延ばす事、ライダーがモンスターになった時に発生するエネルギーを採取して寿命を伸ばそうというのだ。

しかし、今までまどか達に味方していたほむらは何故かキュウベえ側につき、モンスターになることのないまどか達を消し去ろうとしていたのだ。

「まあ、それでほむらちゃんを取り戻そうと、さやかちゃん達と一緒に仮面ライダーになったんだけどね。でも後になって気付いたんだ」

キュウベえはなんらかの方法でリユウガを操り、まだライダーになっていないまどか達を襲い、それに対抗する為にライダーになるよう誘導したのだと。

だが結局キュウベえにとって思わぬ方向に行ってしまったが、モン

スターにならないという。

「友達を……、誰かを助けたいからライダーになった。単純かもしれないけど、それが……」

そこまで言い、さくらにまどか微笑みかける。

「私の願いだから」

「願い……」

「さくらちゃんが小狼さんを助けたいって思う気持ちもきっと一緒」

さくらは立ち上がり、まどかに「ありがとう」とお礼を言った後、走り出した。

＊

その頃の主人公&ヒロインは……。

「「今回出番少ないね」」

と家で呟いていた。

すると突然龍夜の持っている携帯電話から電話がかかってきた。

「はい？　もしもし？」

龍夜が携帯に出ると……。

『あつ、龍夜さん！？　お願いします、今すぐ助け……きゃあああ
あ……！？』

「ママ……！？」

それはママからかかってきたものであり、龍夜とライハ、小狼は急いでその場所に行こうとするが……。

「どこ行けばいいんだ？」

その龍夜の言葉に、2人がずっこけた。

「だ、大丈夫！　こんなこともあろうかと、人を探す探索魔法を習
ってたから！」

という訳で、龍夜達はライハの魔法でママ達のいる場所を見つけ、
そこへ向かう。

「あつ、でもライハはここにいろ」

「え……？」

頬を膨らませるライハを可愛いと感じながらも龍夜と小狼はママ達の
いる場所へ。

*

何処かの森、そこでは黄金の不死鳥を思わせる「仮面ライダーオーデイン」と仮面ライダーリュウガ、マミの変身したゾルダ、さやかの変身したナイト、杏子の変身した王蛇が戦っていた。

しかし、オーデインとリュウガの圧倒的なパワーに3人は押されており、そこへ丁度まどかが変身した仮面ライダー龍騎が現れる。

「まどか！ 遅い！」

ナイトが龍騎に言い、龍騎は「ごめんねみんな」と謝った後、それぞれ並び立つ。

「ほむらちゃん！ いい加減目を覚まして！」

「ハア！！！」

オーデインが龍騎達に衝撃波を放つ。

『きゃあああ！！！？』

龍騎達は吹き飛び、リュウガがドラグセイバーを構えて龍騎達に襲いかかろうとした時。

『アタックライド・ブラスト！』

複数の弾丸「ダークディケイドブラスト」がリュウガに炸裂し、動きを止める。

そこにダークディケイド、クウガ・マイティフォームが駆けつける。

ダークディケイドはカードを1枚取り出し、ドライバーに装填。

『カメンライド・カブキ!』

ダークディケイドはカブキが変身していたライダー、「D歌舞鬼」に変身し、刀型の音叉剣を取り出す。

「音叉剣!! まどかはほむらの目え覚まさせて来い!!」
「はい!!」

龍騎はリュウガに向かって行き、他のライダー達はオーデインに立ち向かう。

D歌舞鬼は音叉剣でオーデインに斬りかかったがオーデインは片手で受け止める。

「はああ!!」

王蛇がベノサーベルで、ナイトがダークバイザーでオーデインの背後から攻撃を仕掛けたが、一瞬にしてオーデインは消え、そのまま攻撃はD歌舞鬼に。

「ぐわああ!!?」

「わりい!」

「あいつどこ行った!?」

次の瞬間3人の目の前にオーデインが現れて衝撃波をD歌舞鬼、ナイト、王蛇を吹き飛ばした。

『うわああああ!!!!?』

『シュートベント』

ゾルダがランチャー型の武器「ギガランチャー」を召喚し、銃口をオーディンに向けるが、オーディンは杖型の「ゴールドバイザー」をどこから取り出し、カードを装填。

『スチールベント』

即座にギガランチャーはオーディンの元へ行ってしまう、ギガランチャーはオーディンの武器になってしまった。

「そんなっ!?!」

ギガランチャーでの砲撃を喰らうゾルダ。

「フン」

「きゃあああ!!!!?」

「うおおお!!!」

クウガがオーディンへ殴りかかったが、オーディンは軽くかわし、クウガの背中を叩きつける。

「おわあ!?!」

戦いの様子を伺うキュウベえは……。

「モンスターにならない君達にもう用は無い。でも、まさかさつき契約した人間もまどか達と同じ願いをするなんてね」

その頃、龍騎とリュウガはドラグセイバー同士をぶつけ合わせ、何処かの廃ビルで戦い合っていた。

「ほむらちゃん!! 目を覚まして!!」

龍騎の言葉に耳を貸さずに攻撃を仕掛けてくるリュウガ。

「ほむらちゃん!! 目を覚まして!!」

「はああ!!」

強烈な蹴りを龍騎に喰らわせ、蹴り飛ばされる龍騎。

龍騎とリュウガは途中から殴り合いになり、壁に叩きつけられる。

「うぐッ!? ほむらちゃん!」

『アドベント』

黒い龍、「ドラグブラッカー」がリュウガの背後に現れ、龍騎に迫るが、龍騎は壁から離れるとその壁から赤い龍「ドラグレッダー」が壁を突き破って現れ、ドラグブラッカーと戦い合う。

「ギシヤアアア!!!」

そして、屋上まで行き戦いは続き、龍騎は向かいの廃ビルまでリュウガに殴り飛ばされる。

「きゃあああ!!!?」

リュウガは必殺技を発動させようとカードをデッキから1枚抜き取り、ブラックドラグバイザーに装填しようとしていたが……動きを

止めた。

「ぐっ……!!」

「ほむら……ちゃん？」

移動して様子を見ていたキュウベえは、自分の洗脳に抗っているほむらに驚愕していた。

実は、ほむらはキュウベえのある技術により洗脳されており、邪魔な存在である龍騎達を始末させようとしていたのだ。

因みにこの洗脳は危険なものらしく、使えるのは1回のみ。

そしてその1回の洗脳が、解けかけていたのだ。

「ほむらちゃん!! 私だよ!! まどかだよ!! お願い、戻って来て!!」

「まど……か……!!」

「なぜだ? どうして洗脳が解けかけているんだ?」

キュウベえの疑問に、彼の背後に現れた白鳥を思わせる白いライダーが答える。

名を「仮面ライダーファム」。

「簡単だよ。それは、彼女達の絆は、あなたじゃ消す事なんて出来ないから」

背中にあるマントのようなものを広げてファムは飛行し、ダークデイズの元へ向かった。

龍騎はリュウガの名前を呼び続ける。

「お願いほむらちゃん!! 戻って来て……、あなたは、私の最高の友達だから……」

その優しく語りかける龍騎の、まどかの言葉に、頭を抱えていたりユウガは落ちつき、龍騎に対して頷く。

「心配かけたわね、まどか」

「ほむらちゃん!!」

＊

ダークディケイド、クウガ、ナイト、ゾルダ、王蛇はオーディンの圧倒的なパワーの前に倒れこんでおり、クウガに剣型の武器「ゴルドセイバー」を突きつけた時。

「はあああ!!」

空中からダークバイザーに似た白い剣「ブランバイザー」でオーディンを斬りつけた。

「ぐおお!?!」

「小狼くん!」

ファムの声でクウガは誰かすぐ分かった。

「さくら!？」

ファムの正体がさくらである事に……。

そこへドラグレッダーとドラグブラッカーの2体の炎がオーデインに放たれ、吹き飛ばされるオーデイン。

「ぐおおお!!?」

龍騎とリュウガが駆けつけたのだ。

「ほむら、お前……!」

王蛇がほむらの名を呟く。

「後は頼んだわ」

ゾルダの言葉に、龍騎とリュウガ、ファムと立ち上がったダークデ IKEイドが頷く。

「んしゃっ! 行くぜ!!」

ダークデ IKEイドのその台詞を合図に、龍騎、ファム、リュウガと共にオーデインに立ち向かう。

「やあ!!」

龍騎が殴りかかるがオーデインは受け流し、衝撃波でリュウガとダークデイケイドを吹き飛ばしたが……。

『ガードベント』

『ウイングシールド』という白鳥の翼を広げたような盾を召喚し、白い羽が降り注ぎ、オーデインはゴールドバイザーにフームに斬りかかったがフームは一瞬で消え、辺りを見回すオーデイン。

「「はあああ!!」」

その隙にリュウガと龍騎の飛び蹴りを喰らい、さらにダークデイケイドのダークライドブッカードモードでの攻撃を喰らうオーデイン。

「ぐぬ!？」

そして突然現れたフームにブランバイザーで斬りつけられる。

「ぬおう!？　くそっ!!　何故此处までの力が!？」

「教えてやる。こいつ等はチームだ!　互いを信じ、支え合い、誰かを守るために戦う……。硬い絆で結ばれたチームってのはな、お前なんかよりもずっと強いんだ。知ってたか？」

その時、ダークデイケイドのダークライドブッカードからカードが6枚飛び出す。

「貴様、何者だ!？」

「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ!!」

一気に新たに力を取り戻したカード2枚をドライバーに装填。

『ファイナルフォームライド・リユリユリユウキ！　リユリユリユウガ！』

「少し我慢しとけ」

「ちょっと、なにをする気……うつ！？」

「ひゃう！？」

龍騎はドラグレッダー、リユウガはドラグブラッカーに酷似した「リユウキドラグレッダー」と「リユウガドラグブラッカー」に超絶変形し、赤い炎と黒い炎をオーデインに放ってくるがオーデインは瞬間移動する。

だが、そこにダークデイケイドの放ったダークデイケイドブラストが直撃し、追い打ちとして炎をオーデインに放つリユウキドラグレッダー、リユウガドラグブラッカー。

『ファイナルアタックライド・リユリユリユウキ！　リユリユリユウガ！』

「はああ！！　はあああ……おりゃああああ！！！！」

リユウキドラグレッダーとリユウガドラグブラッカーの炎を身体に纏いダークデイケイドが放つ必殺キック、「ダークデイケイドダブルドラグーン」を避ける間も無かったオーデインに炸裂させ、オーデインは火花を散らし爆発した。

「ぐわあああああ！！！！！！？」

＊

その後、外でさくらはまどか達と同じ願いをしてライダーになったことを一同に話した。

「心配させるなよ、さくら」

「ごめんね？」

上目遣いで謝るさくらに顔を真っ赤にしながらもさくらの頭を撫でて許す小狼だった。

「それと……まどかちゃん」

さくらはまどかを呼ぶ。

「んっ？」

「ありがとう……」

さくらとまどかは微笑みあい、小狼、さくら、龍夜は家へと帰った。

家に帰り、小狼とさくらの仲がさらに深まった気がする。

「そろそろ次の世界に行こうか？」

「そうだな」

ライハの言葉で龍夜は背景ロールの鎖を弄り、新たな絵が降りてきた。

そこには犬耳を生やした兵士の格好をした者達と猫耳を生やした兵士の格好をした者達が戦っている様子であり、中央には「仮面ライダーキバ」の紋章が描かれていた。

*

次回予告

南爪

「お・な・か・す・い・た！」

シンク

「君ってあの時の仮面ライダー？」

ライハ

「もっとね、自分の気持ちに素直になってみたら？」

次回『K I B A D A Y S』

第8話 『それが私の願いだから』 (後書き)

最近、昭和ライダーも見始めました。

スーパー1とRXの一卷しか見てないけどまだ。

取りあえず、次回は犬日々！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0012y/>

仮面ライダーダークディケイド 黒き世界の破壊者の旅

2011年12月2日20時46分発行